みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

Possibilities of the Ethnography by the Postsoviet anthropologists : Imagined nationality and ethnicity in nationalism : Russian subgroups in post-Soviet Russia : Some movements for new ethnic status and “Rights”

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 伊賀上, 菜穂 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00001251

第Ⅱ編

ポスト社会主義民族誌の可能性

高倉浩樹・佐々木史郎編『ポスト社会主義人類学の射程』
国立民族学博物館調査報告　78:225-266(2008)

ロシア連邦における ロシア人サブグループをめぐる昨今の状況
――民族の境界と「権利」の諸相――

伊賀上　菜穂
大阪大学非常勤講師

多民族国家である旧ソ連およびロシアにおいて，「民族」という概念は重要な政治的意味を持っている。本稿ではポスト社会主義時代における「民族」概念の意味とその利用の方向を検証するために，「ロシア人サブグループ」に位置づけられた諸集団，すなわちロシア極東の「古参住民」(カムチャダールなど)，ロシア・ヨーロッパ地域のコサックとポモール，そしてブリヤート共和国のロシア人集団を対象に，その政治的・学術的動向を考察した。1980年代後半以降，これらの集団のもとでは，「独立した民族」や「先住小数民族」への認定運動，あるいは逆にロシア人としての正統性の主張などが観察されてきた。これらの運動は一見相反する傾向を持つものの，そこには「先住性（korennost’)」または「地元性（byt’ mestnym)」に基づく権利の要求という共通の思想がある。ソ連時代には重要ではなかったこのような概念の再評価，新解釈の背景には，ソ連崩壊後の「諸民族の独立」がロシア人に与えた影響を見出すことができる。

1　民族範疇の問題とロシア人サブグループ
2　ロシア・ソ連における「ロシア人」の位置づけ
3　ソ連におけるロシア人サブグループの研究動向
3.1　ロシア人の多様性と「エトノス」論
3.2　ロシア人サブグループの分類
4　ポスト社会主義時代のロシア人サブグループ
4.1　現在の研究動向
4.2　先住少数民族基本法と国勢調査
5　ロシア人と「先住民族」のあいだで――ロシア極東・極北部住民
5.1　混血集団の「民族」意識
5.2「カムチャダール」名称をめぐる混乱
5.3　マルコヴェツ――さまよう民族籍
5.4　サハ共和国の古参住民――「ロシア人性」をめぐる諸局面
5.5　土地への帰属意識と隣接諸民族からの反発
6　ヨーロッパ・ロシアにおける「民族」運動
6.1　コサック――階層か，民族か
6.2　民族性の二重解釈――ポモール
6.3　地域主義と民族運動の結合
7　ブリヤート共和国のロシア人
7.1「民族」運動への関心の薄さ
7.2「先住性」と「古参性」の新解釈
8　結論

＊キーワード：ロシア人，民族下位分類，民族政策，先住性，国勢調査

1 民族範疇の問題とロシア人サブグループ

ロシアおよび旧ソ連邦の主要民族であるロシア人は，16世紀に始まるモスクワ国家の領土拡張とともに，その居住地域を拡大してきた。西は黒海から東は太平洋まで，南部のステップ地帯から北部のツンドラ地帯まで進出した彼らには，様々な地域を帝国や連邦に束ねる要の存在として，国家の標準文化を体現する存在であることが期待されてきた。

それにもかかわらず，ロシア・ソ連の民族政策やそれを支える民族理論のなかで，ロシア人が主要な分析対象になることは少ない。それは多民族国家における民族政策が，非主流派を調査・分類してその処遇を決定するという性格を持つためであり，主流派のロシア人は既知の存在として調査対象の外側に置かれるからである。ロシア・ソ連の民族関係研究において，ロシア人の姿はその他の諸民族の視点によって間接的に浮かび上がる。だがそれは支配者や統治者，大量の移住者，あるいは「ロシア化政策」の形をとった，内部が見えない巨大な影のようなものだ。

しかし実際の「ロシア人」は，その居住領域を拡大するなかで多くの民族との混血や文化接触を繰り返して形成された範疇であり，その「標準化された多数派」というイメージとは裏腹に，きわめて複雑な内部構造を持っている。ロシア人が国内の諸民族を分類した後に残された「その他大勢」であるならば，「ロシア人」と「非ロシア人」との境界を規定する多様な要素を分析することによって，ロシア・ソ連の民族政策や民族関係により深い理解をもたらすことが可能となるだろう。本稿ではロシア人と非ロシア人との境界付近に位置づけられた人々のうち，様々な特徴によって「ロシア人一般」とは区別される集団，すなわち「ロシア人サブグループ」を分析対象として選択し，その特徴を検証する。

ある集団を他の集団の下位に分類し，民族サブグループと呼ぶことは，それ自体が民族政策の産物であり，民族境界の画定を課題としたソビエト民族学の「成果」でもある。したがって民族サブグループの学術的，政治的位置づけからは，各時代の民族理論の影響を読み取ることができる。特にペレストロイカ政策が始まった1986年以降は，民族主義の高揚とともにサブグループのあいだでも集団の公的な位置づけを問い直す様々な動きが生じており，その過程で興味深い個別研究が数多く著されている。

本稿の目的は，これら諸研究を全ロシア規模で比較することにより，ポスト社会主義時代のロシア人サブグループの傾向を総合的に把握することにある。ソ連崩壊以後，旧ソ連地域の民族研究はすでに高いレベルに達している。今回そこにロシア人サブグループに関する知識を加えることで，ロシア人対非ロシア人という対立図式を超えた，新しい見方を呈示したいと思う。

以下では，いくつかのロシア人サブグループを対象として，その政治的，学術的状況

の変化を通時的に考察していく。２～４節では，帝政時代から現在にかけてのロシア人およびロシア人サブグループをめぐる政治的，学術的動向を概観する。続いて５～７節では，ロシア連邦に居住するロシア人サブグループのうち，近年民族範疇をめぐって顕著な動向が観察されている集団を選び，その詳細を検証する。具体的にはロシア極東・極北部の「古参住民」４集団（カムチャダールなどの初期移住者），ロシア連邦のヨーロッパ地域（以下，ヨーロッパ・ロシアと記載）のコサックとポモール，そして筆者がフィールド調査[1]を行ってきたブリヤート共和国のロシア人集団を取り上げる。

ここで，本稿で用いる術語や訳語について解説したい。本稿では民族の下位分類を表す用語として，「民族サブグループ」あるいは「サブグループ」を採用した。ソ連および現ロシアの民族学において，このカテゴリーは「サブエトノス」「民族グループ」「民族学的グループ」などと呼ばれている。また日本では，「サブエスニックグループ」という術語が使用されることが多い。しかし各術語の定義には混乱が見られる。また今回取り上げる諸集団のなかには，今まさに既存の分類をめぐって議論が進んでいるケースも含まれている。以上を考慮して，本論では暫定的に「サブグループ」という表現を統一的に用いることにした。

民族名，サブグループ名の日本語表記は，慣例がある場合はそれに従う（ブリヤート，コサック，カムチャダールなど）。また国名との区別が難しい民族名にのみ「人」をつけた（ロシア人など）。なお本稿では「ロシア人」を常に民族の意味で用いており，ロシア国家の住民全体を指すときは「ロシア連邦国民」等と表記する。日本語の慣例表記が確立していない名称については，ロシア語の男性単数形（辞書見出し形）を採用した（ポモール，セメイスキーなど）。またロシア語の原語も原則として単数形をローマ字で表記するが，ロシア人サブグループのみ，初出時に原語の単数形と複数形を記した。

ロシア語には「ナツィオナリノスチ」「エトノス」「ナロード」「ナロードノスチ」など，日本語の「民族」にあたる用語が多く存在しているが，特に強調する場合以外は全て「民族」と訳出する。ただし身分証に記載される民族帰属（natsional’nost’，ナツィオナリノスチ）には，「民族籍」の訳語を当てた。旧ソ連地域の学問名称は，「エトノグラフィヤ（etnografiya）」を民族学，「フォリクロリスチカ（fol’kloristika）」（口承文芸学）を民俗学と訳す。ソ連崩壊後に「エトノグラフィヤ」に替わって使用され始めた「エトノロギヤ（etnologiya）」も，煩雑さを避けるために「民族学」と訳している。またロシア人を研究対象とする民族学は「ロシア人民族学」と記し，ロシア連邦全体の民族学と区別した。

地理区分では，現ロシア連邦のサハ共和国，アムール州以東をロシア極東（または極東），それ以外のウラル山脈以東をシベリアと呼ぶ。またシベリアのうち，クラスノヤルスク辺区以東を東シベリアとみなす。行政区分は原則として該当する時代の名称を用いた。

2 ロシア・ソ連における「ロシア人」の位置づけ

多民族国家として発展したロシア帝国において，領域内に住む人々の民族分類は統治に不可欠な知識であったが，それはソ連時代ほど厳密なものではなかった。

帝国末期の1897年に実施された全ロシア国勢調査では，住民の「民族（narodnost'）」帰属は主に言語と信仰によってゆるやかに規定されていた（Troinitskii 1899-1905；佐々木 2004：124-127）。この調査でいう「ロシア人（russkii）」とは現在のロシア人，ウクライナ人，ベラルーシ人を包含しており，3民族はその下位分類として，それぞれ「大ロシア人（velikoruss または velikoross）」，「小ロシア人（maloross）」，「白ロシア人（beloruss）」と呼ばれていた。各民族は基本的に言語によって分類されていたものの，実際には（ポーランド語とウクライナ語，ベラルーシ語との境界も含め）言語の境界は厳密に規定できず，民族境界の画定には地域や自意識，信仰，階層（soslovie：貴族，聖職者，商人，町人，農民，コサック等）などの情報が用いられた[2)]。

階層にはもう1つ，「異族人（inorodets）」という区分があった。「異族人」という言葉自体は「生まれを異にする者」「異民族」という意味を持っており，ロシア人民族主義が高揚した20世紀初頭には，「大ロシア人」以外の全ての帝国臣民（ウクライナ人，ベラルーシ人も含む）を指して用いられることもあった。しかし階層としての「異族人」は，1822年に制定された「異族人統治規約」によって導入されたもので，シベリア，極東，中央アジア，カフカス（コーカサス）地方の「アジア系」住民，およびユダヤ人にのみ適用され，ほとんどのヨーロッパ系民族やザカフカス（トランスコーカサス）地方の主要民族（現在のアルメニア人，グルジア人，アゼルバイジャン人など）はその対象にならなかった（Slocum 1998）。さらに「異族人」階層の者も，国教であるロシア正教[3)]や軍務義務の受容，ロシア人を含む非異族人との結婚によって，本人や子孫が「農民」や「商人」などの階層に移行することがあった[4)]。そのため国勢調査のなかで報告される階層は，ロシア人と非ロシア人の違いのみならず，現地のアジア系住民とヨーロッパ・ロシアからの移住者の違いさえも確実に反映するものではなかった。

1917年のロシア革命によって帝政に終止符が打たれ，民族自決の原則を謳うソ連邦が成立すると，階層や信仰に基づかない新たな民族分類の確立が急がれた（田中 2001：103-201）。だがそれはきわめて困難な作業であり，またしばしば政治的判断を伴ったため，将来への大きな課題を残すことになった（佐々木 2001：60-72；塩川 2004：48-58）。

民族境界画定の難しさは「ロシア人」にも共通していた。ソ連時代初期の民族政策は，「帝政期に進行した『同化（ロシア化）』を逆転させ，むしろ過去に同化（ロシア化）した人々をも『元来の』民族に復帰させようとする方向」（塩川 2004：48-49）を持っていたという。この方針がよく当てはまるのは，もともとロシア人との境界が明確ではな

いウクライナ人とベラルーシ人，そして，ロシア正教を受容していた非スラブ系集団であった。だが実際には,「ロシア人」と「非ロシア人」を区別する厳密な分類基準があったわけではなく，当人の自意識のみならず，民族学者や行政関係者の多分に恣意的な判断によって，住民の「民族籍」が決定されていった（本章５節参照)。

第２次世界大戦以降，ソ連の民族政策のベクトルは，諸民族の独立から「ソビエト人」としての統合へと変更された。その背景には同一の政治体制や第２次世界大戦への参加という共通体験を通して， 各民族の生活様式や価値観が近接してきたことがあった。1960年代に登場し70年代に本格化する「諸民族の接近と融合」政策では，「民族間交流語（mezhnatsional'nyi yazyk)」としてのロシア語の知識が重視されるようになり，非ロシア人のロシア語習得率が政策遂行のバロメーターの１つとなった（田中 2001：162-167, 186-201, 220-242)。 また民族間結婚も奨励されたが， ロシア人と非ロシア人の結婚では，生まれた子どもにロシア人の民族籍を与える割合が高かった[5)]。

こうしてソ連時代後期のロシア人は,「諸民族の長兄」として賞賛されながらも,「ソ連国民」との境界が曖昧な,「民族」色の薄いカテゴリーになっていった。 それゆえ1991年のソ連解体は， 連邦との一体感が強かったロシア人に特に大きなショックを与えた。ソ連から「独立」したロシア連邦内で，かつての自治共和国や自治管区が次々に主権宣言を出して連邦内共和国の地位を獲得していくなかで，民族共和国を持たず，また「民族文化」と「旧ソ連・ロシア連邦の文化」との境界が見えにくいロシア人は，自らの民族アイデンティティを求め， 模索を続けている（Zubkova and Kupriyanov 1999：299-300)。

現在のロシア連邦は，基本的にソ連時代の民族政策を引き継いでいるものの，プーチン政権下では民族原理に基づいた地方行政を見直す動きが加速し，自治管区の廃止が相次いでいる（渋谷 2004)。「ロシア連邦国民」を強調する国民主義と， 各民族の価値を強調する民族主義がせめぎあうなかで，既存の民族範疇への異議申し立ても行われるようになった。それはロシア人の場合でも同様である。

3 ソ連におけるロシア人サブグループの研究動向

3.1 ロシア人の多様性と「エトノス」論

ソ連時代初期のロシア人民族学は，帝政時代からの伝統を引き継いで主に農村地域を研究対象としてきた。 しかし1930～1940年代のスターリン体制下では， 農業集団化，粛清，第２次世界大戦がもたらした社会構造の激震のなかで，民族学的調査はほぼ不可能な状態にあった。 1953年にスターリンが死去し， また戦後の社会状況が安定してくると，ロシア人民族学もふたたび勢いを取り戻すとともに，伝統的な研究領域に加えて，農業集団化を経た同時代の村や都市住民の生活も研究の対象とされるようになった

（Shmeleva 1987：47–50）。

このような流れのなかで，ポスト・スターリン期のロシア人民族学の関心はソ連全域へと拡大していったが，それでも当初は「国家のヨーロッパ地域の主要領域における民族文化の共通性の問題がもっとも急を要し」（Lipinskaya 1996：8）ていたため，その他の地域の研究は後回しにされていた。しかし1950年代末からはシベリア，カフカス，中央アジア，沿バルト海地方など，ヨーロッパ・ロシア以外の地域へ目を向ける余裕もでき，それと同時に「ロシアとして言説化された集団を，形質・自称・言語（方言）・宗教・土着と移民・歴史性・生業その他の物質文化・地域性・社会集団などの特性（例えば，軍団としてのコサック）などの指標によりサブグループ化してミクロにとらえようとする仕事も生まれた」（坂内 2004：732）。

如上の学術的傾向は，ソ連全域を１つの社会として把握し，そこに国民としての一体感をはぐくもうとした当時の政治志向と密接な関係がある。田中克彦によれば，「『民族の問題』に広い関心が向けられる具体的なきっかけは，『共産主義の物質的・技術的基盤の確立』のために諸共和国間の緊密な相互協力が必要だと説いた1961年の第22回ソビエト共産党大会を機としてはじまったと見られる」（田中 2001：166）。1950年代以降，ソ連ではシベリア開発や中央アジアでの「処女地開拓」など，「辺境」への視線が拡大し，計画経済に基づいた連邦内の労働力と原材料の大規模な移動がシステム化されつつあったのだ。

1970年代になると，「民族」に関する議論は，モスクワの民族学研究所所長ブロムレイなどによって構築された「エトノス（etnos）」論を中心に展開するようになる（井上 1987）。ブロムレイは民族形成論のなかで民族サブグループについても触れ，自称と自意識の有無によってそれを「民族グループ（etnicheskaya gruppa）」（後に「サブエトノス（subetnos）」に改称）と「民族学的グループ（etnograficheskaya gruppa）」と呼んで区別した。前者は自意識を持つのでイーミックな分類，後者は自意識に基づかないためエティックな分類だといえる。ブロムレイによれば，ロシア人の場合は前者にコサックやポモールが，後者には主に方言分類に基づいた「北ロシア人」「中央ロシア人」などの集団が該当するという（Bromlei 1981：48–49；1983：85, 353）。

ブロムレイによるこの民族下位分類は，その後も検討が重ねられていくが，その１つの総括とみなすことができるのが，ソ連崩壊直後の1992年に刊行された論文集『エトノスとその下位分類[6)]』，およびその巻頭に置かれたクゼエフとバベンコの論文である。

この論文のなかで，クゼエフらはブロムレイの「民族グループ」「民族学的グループ」という術語を主に「母体エトノス」との関係によって再定義する。それによると「民族学的グループ」とは，「言語や物質文化，精神文化の一定の特徴によって（民族の：筆者註）主要集団とは異なるが，母体民族の領域内で機能し，民族内の結集プロセスに参加する民族の一部」（Kuzeev and Babenko 1992：19）である。この範疇にはブロム

レイが「サブエトノス」に分類したコサックやポモールなどが含まれている[7)]。

もう一方の「民族グループ」は，「移住によって母体民族からある程度離れ，主要な民族領域の外で，程度の差はあれ異なる言語文化環境のなかで機能してきた」（Kuzeev and Babenko 1992：19）集団と説明される。このグループに分類されるのは，ソ連国内の別の共和国や民族自治区などへ移り住んだ人々（中央アジアの共和国に移住したロシア人労働者など）などである。また「民族グループ」に似ているものの，「主要部分が外国に居住している民族の一部」（ソ連に住むサーミやアレウトなど）は「ネーション・グループ（natsional'naya gruppa）」と名づけられ，前者から区別されている（Kuzeev and Babenko 1992：34）。

ブロムレイの理論が民族サブグループの静態（共時的状況）を説明するものであるのに対し，クゼエフとバベンコは民族サブグループの動態（通時的な変化）をも理論化しようとしており，その点で前者の理論をより発展させている。ただし両者には共通点も多い。そのもっとも重要なものは，どの集団も必ずどれか１つの民族に帰属するという考え方である。クゼエフらは民族意識の可変性を認めており，「民族グループ」が母体民族とは異なる民族に吸収されたり，新しい民族として独立したりする可能性を肯定している。民族のなかの流動性を認めることは，1970年代以降に本格化したソ連の「諸民族の接近と融合」政策に合致するものであり，また実際に連邦内の人口移動の活性化を反映した考え方でもある。しかしクゼエフらは帰属意識の曖昧さを過渡期的なものとみなしており，その状態で固定されるとは考えていない。

さらにクゼエフらは，ブロムレイと同じく，既存の公的民族帰属を見直す意図は持っていない。クゼエフらの分類法では，ソ連国内に住み自称を持つ民族サブグループ（ブロムレイの「サブエトノス」）は，基本的に「民族学的グループ」，つまり「民族内部の結集プロセスに参加する」集団に区分されており，すでに母体民族と不可分な関係を持っていると理解されているのだ。

既存の民族分類を不問に付す姿勢は，民族学の隣接分野（人類学，歴史学，言語学，民俗学）にも共通して見られる。その１つ，形質（自然）人類学（antropologiya）では，1950年代後半からロシア人を対象とした研究が活性化するなかで，ロシア人内部の差異が分析されてきた。特に熱心に調査が行われたのはロシア人の歴史的居住地域，つまりヨーロッパ・ロシアであり，ロシア民族の起源とその形成過程の解明を目標に，考古学とも協力しながら分析が進められていた（Aleksandrov et al. 1997：57–79）。これに対してロシア人の移住先であるシベリアでは，移住領域の拡大過程の調査や環境適応の観点から調査が行われたが，当然そのなかではロシア人と先住民族との混血が再確認された（Bunak and Zolotareva 1973）。しかし混血の有無やその程度によって「民族」帰属を見直そうとする動きは，研究者側からも当事者側からも現れてこなかった。

3.2 ロシア人サブグループの分類

ソ連時代以降，ロシア人を対象とする民族学は具体的にいかなる集団をロシア人サブグループに分類してきたのだろうか。1970年代末に作成された「ロシア人分布図（20世紀初頭）[8]」（Ozerova and Petrova 1979）に基づき，その選定基準を確認しよう。

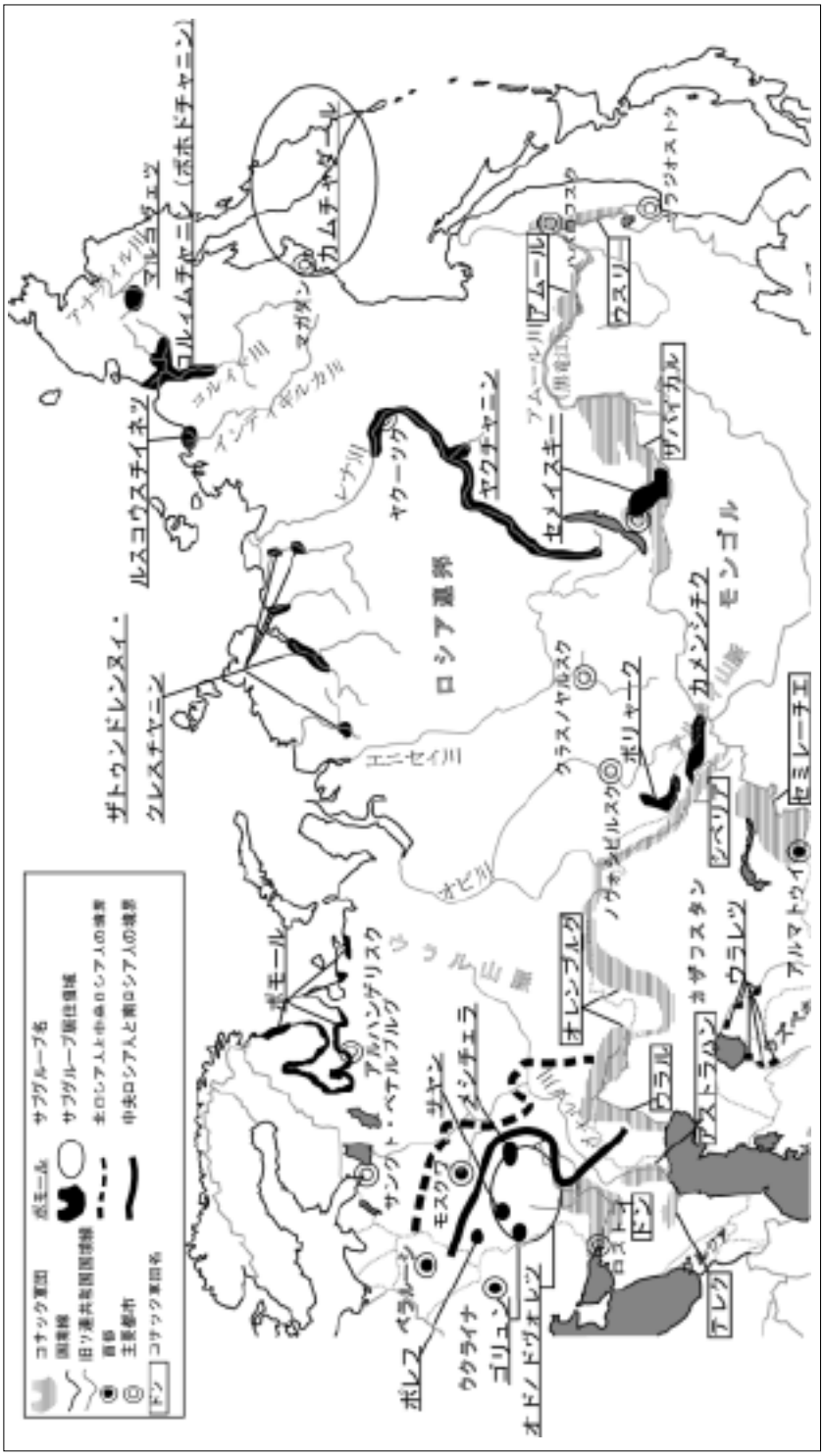
オゼロヴァとペトロヴァによれば，この地図はレニングラード（現サンクト・ペテルブルグ）のソ連諸民族民族学博物館（現ロシア民族学博物館）の要請によって，レニングラード国立大学地図作成講座で用意されたものである。同地図は，後に民族学研究所から刊行された『東スラブ民族学』や，ソ連崩壊後に同研究所（民族学・人類学研究所に改名）によって刊行された『ロシア人』（「民族と文化」シリーズ）にも掲載されていることから（Shmeleva 1987：54–55；Aleksandrov et al. 1997：44–45），1980年代以降のロシア人民族学界における標準的な分類とみなすことができる。

この地図の時代区分は，ソ連時代の民族政策・人口変動を考慮してソ連邦成立以前の20世紀初頭に設定されている[9]。また著者たちは地図に記入した集団を，「自意識に反映されない特徴（方言など）による分類」と「自意識と自称による分類」とに２分している。ブロムレイの用語では，前者は「民族学的グループ」，後者が「サブエトノス」となる。

「自意識に反映されない特徴による分類」として地図に記入されているのは，ヨーロッパ・ロシアの「中央ロシア人」「北ロシア人」「南ロシア人」である（【図１】を参照）。この分類はロシア語の主要な方言圏とほぼ一致する。該当地域は，ロシア人が早くから居住していた主要な民族領域であり（ヨーロッパ・ロシアの南端と北端は除く），他地域のロシア人の祖先も基本的にこの地域からの移住者である。ロシア人民族学でもこの地域の人々をロシア人のメイン・ストリームとみなし，彼ら（特に農村住民）の文化を研究することで「ロシア民族文化」の再構築を試みてきた。しかし本稿で注目するのは「ロシア人」と「非ロシア人」の境界であるため，これらの集団は主要な考察対象から除外する[10]。

一方，後者の「自意識・自称を持つグループ」は，文化や生活様式の特殊性，または非ロシア人との接触・混交といった様々な特徴によって民族の「主要集団」（Kuzeev and Babenko 1992：19）から区別される集団であり，本稿の関心とも合致する。オゼロヴァらはこの範疇に含まれる集団を「民族・社会的グループ（etno-sotsial’naya gruppa）」と「歴史的・民族学的グループ（istoriko-etnograficheskaya gruppa）」とに２分し，前者には帝政時代に特殊な軍務階層を構成した「コサック（カザーク）（kazak / kazaki）」を分類している。帝政末期のコサックは，ロシア帝国南部の国境地帯を中心に，西のカフカス地方からロシア極東まで幅広く分布していた。

もう１つの「歴史的・民族学的グループ」のリストには，ヨーロッパ・ロシアの６集団，中央アジアの１集団，南シベリアの３集団，そして北シベリア・ロシア極東の



注）オゼロヴァ，ペトロヴァの「ロシア人分布図（20世紀初頭）」（Ozerova, Petrova 1979）に基づき作成。各集団の居住領域は簡略して表示した。また国境および国名・地名は現在のものである。

【図1】　ロシア人サブグループ分布地図

【表１】 ロシア人サブグループ一覧表

	「ロシア人分布図」（Ozerova, Petrova 1979）	先住少数民族基本法（1999）	サハ共和国法（2004）	全ロシア国勢調査（2002）	
本章の関連箇所	3.2節	4.2節	4.2節	4.2節	
全国	コサック			コサック	ロシア人の「民族グループ」
ヨーロッパ・ロシア	ポモール			ポモール カニンスキー・ポモール	ロシア人の「民族グループ」 ポモール内訳
				メゼネツ	ロシア人内訳
	ポレフ				
	ゴリュン				
	サヤン				
	メシチェラ				
	オドノドヴォレツ				
中央アジア	ウラレツ				
シベリア	ポリャーク				
	カメンシチク			カメンシチク	ロシア人内訳
	セメイスキー			セメイスキー	ロシア人内訳
				カルィム	ロシア人内訳
				ケルジャク	ロシア人内訳
				オプスキー・スタロジール	ロシア人内訳
ロシア極東	ヤクチャニン			ヤクチャニン，ヤムスキー，レンスキー・スタロジール	ロシア人内訳
	ザトゥンドレンヌィ・クレスチヤニン			ザトゥンドレンヌィ・クレスチヤニン	ロシア人内訳
	ルスコウスチイネツ		ルスコウスチイネツ	ルスコウスチイネツ，インディギルシチク	ロシア人内訳
	コルィムチャニン		ポホドチャニン	ポホドチャニン，コルィムチャニン，コルィムスキー	ロシア人内訳
	マルコヴェツ	チュヴァン		チュヴァン マルコヴェツ	法定民族名 チュヴァン内訳
	カムチャダール	カムチャダール		カムチャダール	法定民族名

注）同一行には，同一集団の別名のほか，きわめて近い集団を指す名称も含まれている。

6集団の合計16集団が挙げられている（【表1】参照）。

最初のヨーロッパ・ロシアの集団には，「北ロシア人」の下位集団である「ポモール（pomor / pomory）」，「南ロシア人」の下位集団である「ポレフ（polekh / polekhi）」，「ゴリュン（goryun / goryuny）」，「サヤン（sayan / sayany）」，「メシチェラ（meshchera / meshchery）」，「オドノドヴォレツ（odnodvorets / odnodvortsy）」（日本語では「郷士」と訳される）が分類されている。白海沿岸地方（ポモール地方）に住むポモールと，モスクワの南方から沿ヴォルガ地方にかけて住むメシチェラは，ロシア人とフィン・ウゴル系諸民族の接触によって形成された集団だ。オドノドヴォレツはかつての国境を警護していた軍役者が土着化した集団で，農民と小地主貴族のあいだに位置する特殊な存在であった。その他の南ロシア諸集団は，ウクライナ人，ベラルーシ人，リトアニア人，およびかつてこの地に居住していた騎馬民族との接触によって形成されたと言われている（Shmeleva 1987：59–60）。

中央アジアの「ウラレツ（uralets / uraltsy）」（ウラル人）は，ロシア正教古儀式派に属するコサックの子孫で，18世紀のプガチョフの反乱以降，ウラル地方のヤイク川流域からアラル海沿岸，およびそこに流入するアム・ダリア，シル・ダリア川流域（現カザフスタンとウズベキスタン）に移住した人々である（Shmeleva 1987：61）。古儀式派教徒（staroobryadets）または旧教徒（starover）とは，ロシア正教徒のうち，17世紀中葉に実施された典礼改革を拒絶した人々のことをいう。帝政時代，古儀式派教徒は当局や教会主流派（ニコン派）から「分離派教徒（raskol'nik）」と呼ばれて迫害されてきた。そのため彼らの正確な人数は不明だが，一説では，19世紀末の時点で1,000万人を越える信徒がいたという（安村 1983：232–233）。

しかしながらオゼロヴァらの地図には，ロシアの全古儀式派集団が掲載されているわけではない。ヨーロッパ・ロシアに住む古儀式派教徒のように，近隣の非古儀式派住民と共通の文化要素を持つ場合，あるいは新たな入植地などで，様々な地域の出身者のあいだに統一的な文化が形成されていない場合（ロシア極東南部など）は，周囲のロシア人住民から区別可能な「歴史的・民族学的グループ」とはみなされていないのだ[11)]。

南シベリアの3集団，すなわちアルタイ地方の「ポリャーク（polyak / polyaki）」（ポーランド人の意）と「カメンシチク（kamenshchik / kamenshchiki）」（石＝山の人），ザバイカル地方の「セメイスキー（semeiskii / semeiskie）」もまた，古儀式派教徒である。彼らはロシア人移住者があまり多くない地域に比較的まとまった数で入植したため，周囲のロシア人とは信仰以外の文化的特徴によっても区別されてきた。

カメンシチク（ブフタルマ人とも呼ばれる）の祖先は，18世紀に先住民族が住む山岳地帯に逃亡した後，18世紀末にロシア帝国に再帰順したが，その際，アジア系先住民族と同じ「定住異族人（osedlyi inorodets）」の階層に登録されることを例外的に「許され」，一般のロシア人農民のように人頭税を支払う義務を免除された（Lipinskaya 1996：24

-25)。一方，ポリャークとセメイスキーは，17世紀の教会典礼改革の後，ヨーロッパ・ロシアからポーランド領ヴェトカ（現ベラルーシ）付近へ逃れた人々の子孫である。彼らは18世紀後半にロシアの軍隊に捕えられ，農業開拓のためにアルタイ地方とザバイカル地方とへ送られた。カメンシチクがアルタイ地方の先住民族と交流があったと言われるのに対し，ポリャーク，セメイスキーは古儀式派教徒以外との婚姻関係を結ぼうとしなかったため，先住民族との混血が少ないことで知られている（Shmeleva 1987: 61；伊賀上 2003a, 2003b, 2006；宮崎 2005）。

北シベリア・ロシア極東の6集団は，レナ川上流・中流域の「ヤクチャニン（yakutyanin / yakutyane）」（ヤクート地方人），極北のラプテフ海に注ぐエニセイ川やコトゥイ川下流域に住む「ザトゥンドレンヌィ・クレスチヤニン（zatundrennyi krest'yanin / zatundrennye krest'yane）[12]」（奥ツンドラ農民），ユーラシア大陸最東端極北部に住む「ルスコウスチイネツ（russkoust'inets / russkoust'intsy）」（ルスコエ・ウスチエ人），「コルィムチャニン（kolymchanin / kolymchane）」（コルィマ人），「マルコヴェツ（markovets / markovtsy）」（マルコヴォ人），そしてカムチャツカ半島の「カムチャダール（kamchadal / kamchadaly）」である。

北シベリアおよびロシア極東北部がロシア国家へ併合されたのは17世紀以降のことだ。これらの地域には先住民族支配と毛皮獲得，北太平洋貿易のために，早くからコサックや軍人，毛皮業者などが入植したが，その厳しい気候のために農耕地の開発が遅れた。19世紀中旬以降，帝政政府はシベリア，中央アジア，カフカス地方を対象に農業移民促進政策を採ったが，その後も北方への移民はあまり増加せず，比較的少数のロシア人住民が先住民族と隣接して暮らす状況が続いた。そのためこれら極北部のロシア人集団では，他の地域と比較して先住民族との文化的，血統的混交の程度が甚だしい（Shmeleva 1987: 61）。なお「ヤクチャニン」は，ウラジミル・コロレンコの短編小説「マカールの夢」（1885年）の主人公として知られている[13]。また「カムチャダール」は，カムチャツカ半島の先住民族イテリメンの旧称でもある。

オゼロヴァとペトロヴァが作成した地図を利用する場合，少なくとも2つの点に注意する必要がある。その1つは，この地図には自称や言語に特徴がある集団の全てが記載されているわけではないということだ。オゼロヴァらは，シベリアでよく聞かれる「古参住民（starozhil）」（初期移住者）や方言学上の分類である「沿ヴォルガ・ロシア人」を，時代や地域による定義の違いや（本章7.1参照），学術的に未決着という理由で，地図への記載を保留している（Ozerova and Petrova 1979: 77-78）。この民族サブグループの分類基準の曖昧さは，10年後に提唱されたクゼエフとバベンコの理論でも解決されてはおらず[14]，今日にいたるまで研究者のあいだで意見がまとまらない難問となっている（Aleksandrov et al. 1997: 107-123；Burykin and Reshetov 2002；Loginov 2006: 4）。

もう１つの注意点は，この地図が持つ時代の制約にある。つまりこの地図は，ソ連時代以降に各集団が存続していたかどうかを語っていないのだ。ソ連時代に実施された階層の廃止，農業集団化，そして反宗教政策がこれらの集団にいかなる影響を与えたのか。この問いに対して研究者や当事者が真正面から取り組み始めるのは，ペレストロイカ期以降のこととなる。

4 ポスト社会主義時代のロシア人サブグループ

4.1 現在の研究動向

ソ連崩壊後，ロシア人民族学の研究領域は大幅に拡大した。ソ連時代に制限されていた貴族，聖職者，商人，および諸宗教集団に関する研究が解禁され，また事実上アクセス不可能だった亡命ロシア人や北米等のロシア人移民についても，研究対象とすることが可能になった。さらにソ連から独立した諸共和国に多くのロシア人が住んでいたため，「ロシア人問題」と呼ばれる緊急課題が発生した。クゼエフとバベンコが提唱していた「ネーション・グループ」（自民族の主要部分とは異なる国に住む集団）という範疇が，ロシア人民族学にとって大きな意味を持つ時代が来たのである（Kuzeev and Babenko 1992：34）。

以上の状況を受けて，民族の統一性とサブグループの問題は，ロシア連邦の領域を越えた大きな議論に発展しつつある。ただし現在のところ，亡命者や移住者の問題は歴史学の範疇として，また「近い外国」（旧ソ連地域の独立共和国）のロシア人問題は政治，外交問題として扱われることが多く，ロシア人民族学の範囲内では十分に理論化されていない。また本稿は社会主義時代とポスト社会主義時代との比較を主な課題としているため，ここではロシア連邦内の集団に対象を絞って観察を進めたい。

現在のロシア人民族学，特に中央の学界では，ロシア人内部の多様性に注目しつつも，ソ連時代と同じく民族としての一体性を強調する傾向がある（Aleksandrov et al. 1997：117-118）。これに対して外部の研究者，つまり外国人や歴史学者，言語学者らと，一部のロシア人サブグループの内部からは，そのような一体性への異議も表明されている。

外部の研究者の異議申し立ては，主にシベリアやロシア極東のロシア人サブグループに関するものである。米国の歴史学者サンダーランド（Sunderland 1996）は，帝政時代の「ロシア人」概念を分析し，それが啓蒙主義に基づいた「非血統主義，文化主義」であり，「上位」に位置するロシア人が「異族人化」するはずがないという思い込みがあったこと，したがってロシア極東・極北部の「異族人化したロシア人」という事実は，中央の「ロシア人」に衝撃を与えたことを指摘した。また次節でも紹介するサンクト・ペテルブルグの言語学者，ヴァフチンとゴロフコ，そして米国の人類学者シュヴァイツァー

は，ロシア極東・極北部の住民に対する現地調査に基づいて，ロシア人民族学者が強調してきたロシア人の「言語や民族的自意識の保持」がいかに不確実なものであったかを主張している（Vakhtin, Golovko and Schweitzer 2004；2005）。

しかし民族範疇や民族意識の曖昧さに対するこのような指摘は，ロシア人サブグループ内部の研究者や活動家からはほとんど聞こえてこない。彼らが自集団をロシア人の一部であると主張するときも，またそれに異議を申し立てるときも，「民族」範疇の存在とその境界画定が可能なことは自明のこととされている。つまり彼らは自分たちがロシア連邦の民族政策という舞台の上にいることを意識し，その範囲内で自らの目的を達成しようとしているのである。各集団の具体的な動向は次節以下で紹介するが，ここではまず，民族をめぐる各集団の主張に大きな影響を与えた２つの政治的決定，すなわち1999年に採択された「先住少数民族（korennoi malochislennyi narod）」に関する法律と，2002年に実施された全ロシア国勢調査を概観しよう。

4.2 先住少数民族基本法と国勢調査

1999年に採択され，発効した「ロシア連邦先住少数民族の権利保障に関する連邦法」は，「先住少数民族」を「祖先の伝統的な居住領域に居住し，伝統的な生活様式，生計活動ならびに生業を維持し，ロシア連邦内において５万人に満たず，自らを独立した民族共同体だと自覚する民族」（第１条の１）と定義し，彼らの「独自の社会・経済的，文化的発展」や「固有の居住環境，伝統的生活様式，生計活動ならびに生業の保護」を保証することを目的としたものである[15)]。

この法律の特徴は，ソ連時代の「北方少数民族（malochislennyi narod Severa）」への権利保障を引き継ぎつつも，法律が適用される集団の範囲を拡大したことにある。ソ連時代の「北方少数民族」の範囲は，基本的に1930年代に選定された26集団で固定されていた（高倉 1994：138-140；吉田 2000：29-30；佐々木 2004：129）。しかし新法では「先住少数民族」の定義が「北方少数民族」よりも広く設定されるとともに，「少数民族に属さないが，少数民族の伝統的居住と経済活動の場所に常住する者」にも，ロシア連邦の構成主体（州，辺区，共和国など）の法令に基づいて新法の諸規定が適用できるようになった（第３条の３）。

この対象範囲の拡大は，「先住少数民族」範疇をめぐる活発な議論をひき起こした。結果として，2000年に発表された「ロシア連邦先住少数民族統一リスト[16)]」には，45の民族名称が掲載されたが，そこには本章3.2で「ロシア人サブグループ」として紹介したカムチャダール[17)]とマルコヴェツ（ただし「チュヴァン（chuvanets / chuvantsy）」として）も含まれていた。また彼らと同じくロシア極東・極北部に住むルスコウスチイネツとコルィムチャニン（ただし後者は「ポホドチャニン（pokhodchanin / pokhodchane）」の名称で）もまた，2004年のサハ共和国法[18)]によって先住少数民族

と同等の権利を保障された（【表１】参照）。

2002年の国勢調査は，1989年の全ソ連調査以来，ロシア連邦で初めて実施された国勢調査である。今回の調査では各人が帰属する民族名を「回答者自身の決定によって」記載することになったため[19]，一部の人々にとっては自集団の存在をアピールする絶好のチャンスと捉えられた。実際には全住民が直接質問に答えたわけではなく（Shabaev 2006：20），また調査員が不適切とみなした名称を回答欄に記入しないケースもあったので（Arel 2002：818），その調査結果も実態を完全に反映したものとは言いがたい。しかしそのような状態にあっても，「民族籍」として報告された名称は，４万1,327通りにのぼった（Federal'naya sluzhba 2004：932-937）。

これらの諸名称はモスクワの民族学・人類学研究所の指導によって分類され，国勢調査報告書のなかではいくつかの異なる位置づけが与えられた。まず142の名称は正式な「民族（natsional'nost'）」に認定され，さらに40名称がこれら諸「民族」の主要サブグループ —— 報告書内の用語は「民族グループ（etnicheskaya gruppa）」—— に選ばれて，「ロシア連邦民族構成リスト」に掲載された（Federal'naya sluzhba 2004：929）。このリストに掲載された民族および民族グループは，報告書のなかでその人数や居住地，年齢構成，教育水準，生業などの内訳が示されるのだ（「民族グループ」は人数と居住地のみ）。今回ロシア人（合計約１億1,589万人）の「民族グループ」に選ばれたのは，コサック（14万人）とポモール（6,571人）だけであった。またカムチャダール（2,293人）には独立した「民族」の地位が与えられている。

残りの４万余の名称は，上記142の民族と40の民族グループのどれかに分類されている。そのほとんどは報告書内で名前の記載さえないが，594名称のみ回答者数が公表されている（Federal'naya sluzhba 2004：932-937）。今回「ロシア人」に分類された名称で，報告書に記載されたのは15集団（計272人），同じく「民族グループ」ポモールに分類されたものは１集団（「カニンスキー・ポモール（kaninskii pomor / kaninskie pomory）」７人）だった。また「マルコヴェツ」はロシア人ではなくチュヴァン民族に分類されている。さらに前者15集団の内訳を見ると，ポモールとほぼ同じ地域に居住する「メゼネツ（mezenets / mezentsy）」（メゼニ人の意味，19人）を除き，全てシベリア，ロシア極東の集団である（【表１】参照）[20]。ここから，20世紀初頭にヨーロッパ・ロシアで知られていたロシア人サブグループは，コサックとポモールを除き，集団への帰属意識が高揚していないか，あるいは集団の独自性を強調する必要が実感されていないと推測することができる。

以上の学術的，政治的動向に基づくと，ロシア国内のロシア人サブグループは，大きく４つのタイプに分類することができる。最初のカテゴリーには，先住民族との混血が顕著なロシア極東・極北部の４集団（カムチャダール，マルコヴェツ，ルスコウスチイネツ，ポホドチャニン）が，第２グループには国勢調査で「民族グループ」の扱いを受

けたコサックとポモールが入る。第3カテゴリーには，集団としての自意識は保ちつつも「ロシア人」からの分離志向が低い集団が入る。ここにはシベリアの大部分の集団が含まれる。最後は，今回明確な情報が得られなかったヨーロッパ・ロシアの諸集団である。

次節以下では第4カテゴリーを除く諸集団の具体的な動向を通時的に観察することで，ロシア人サブグループの全体的傾向を示したい。なお第3カテゴリーに含まれる集団は多いので，今回は筆者が調査を続けているブリヤート共和国のロシア人諸集団（セメイスキー，古参住民，カルィム，ザバイカル・コサック）を具体的な考察対象として取り上げる。

5 ロシア人と「先住民族」のあいだで ── ロシア極東・極北部住民

5.1 混血集団の「民族」意識

ロシア極東・極北部に居住するカムチャダール，マルコヴェツ，ルスコウスチイネツ，ポホドチャニンは，比較的古い時代のロシア人移住者の子孫で，「古参住民」と呼ばれている。17世紀以降，この地域にはロシア人が遠征や開発，毛皮採集のために移住し，現地の先住民族と婚姻関係を介して混交していった。帝政時代，これらの集団は近接する集団同士（カムチャダールとマルコヴェツ，マルコヴェツとポホドチャニン，ポホドチャニンとルスコウスチイネツ）で交流があり，交易や婚姻を通して関係を保っていた（Vakhtin, Golovko and Schweitzer 2004: 18）。しかし集団としての成り立ちや生業，隣接する諸民族や新移住者との関係の違いは，彼らの自意識に様々な相違を生んできた。

1980年代後半にペレストロイカ政策が始まると，この地域でも民族籍や民族文化をめぐって様々な動きが生じた。前節で紹介した各集団による「先住少数民族」の地位獲得も，その1つである。一方で既存の民族籍に対する態度とその結果には，4集団のあいだで差異が見られる。彼らのなかで，民族籍変更をめざす大きな動きが観察されたのは，カムチャダールだけである。また残りの3集団の公的民族帰属も，マルコヴェツはチュヴァン，ルスコウスチイネツとポホドチャニンはロシア人というように，それぞれ異なる。

以下ではロシア極東・極北部の各集団の形成過程と，彼らに対する「民族」政策の変化を観察することで，彼らにとって公的な民族帰属がどのような意味を持っているのかを考察していく。

5.2 「カムチャダール」名称をめぐる混乱

カムチャダールとは現在のカムチャツカ辺区[21]（半島側）およびマガダン州（大陸側）

の住民のうち，先住民族と移住者（主にロシア人）の血をひく人々の自称である。ただしカムチャツカ半島の住民はイテリメンの，大陸側の住民はエヴェンやコリャークなどの血を引いている[22)]。3.2で述べたように，「カムチャダール」という名称は日本の民族学，人類学ではカムチャツカ半島の先住民族，イテリメンの旧称として知られている。事実この名称は，ソ連でも1930年代以降，国勢調査の民族名リストから削除されている。「カムチャダール」がイテリメンとは異なる独自の民族として公式に認められたのは，ソ連崩壊後のことである。

「カムチャダール」をめぐる数々の混乱の原因は，この呼称が「カムチャツカの人々」という，広大な地域をカバーする名称であることに端を発している。18世紀以降，カムチャツカ半島にはロシア人と先住民族との混血集団が形成されていったが，彼らは他の定住先住民族（「定住異族人」）と区別されずに「カムチャダール」（カムチャツカの人）と呼ばれてきた。前者はその後，新移住者と自分たちとを区別して「カムチャダール・イコール・混血者」というアイデンティティを獲得していった（Sirina 2005：88）。また19世紀後半からは，「カムチャツカ」を冠する行政区分 —— カムチャツカ管区（1856～1909年）やカムチャツカ州（1909～1920年）—— が半島以外の地域にも拡大されたため，この名称は混血者を意味する自称，他称として，大陸側でも使用されるようになったという（次項「マルコヴェッツ」を参照）。

帝政時代，混血者の文化にはロシア語やロシア正教の強い影響が見られたが，彼らと先住民族との区別は必ずしも明確ではなかった。混血者の階層はコサック，町人，農民など，新移住者と同じこともあれば，先住民族と同じく「異族人」の場合もあった。またその生業にも，ロシア人からもたらされた野菜栽培や乳牛飼育と，先住民族と共通する漁業や狩猟の両方が見られた（Sirina 2005：98）。

1920年代のソ連で民族境界画定作業が始まると，「カムチャダール」を複数の集団に区分する必要性が議論された。このときカムチャツカ半島では，先住民族語を話す北部の集団と，ロシア語（に近い言語）を話す南部の集団が区別された。その結果，前者は「イテリメン」として1931年に「北方小民族（malaya narodnost' Severa）」—— 後に「北方少数民族」に改定 —— に認定されたが， 後者はロシア人に分類されて少数民族枠から除外されていった（Murashko 1997：181；Zhilin 1999；Vakhtin, Golovko and Schweitzer 2004：104-109）。

「カムチャダール」名称が国勢調査から消えたあとも， 大陸側（現マガダン州）の統計には1940年代までカムチャダール人口が計上されてきた。1950年代からはカムチャダールをロシア人に読み替える傾向が強まるが，それでもこの地域では1970～1980年代まで，「カムチャダール」名称が一部の人々の民族籍として身分証や各種証明書に記載されていたという。だが1979年の国勢調査以降，「北方少数民族」の諸権利を維持するために，民族籍を「カムチャダール」からエヴェン，コリャーク，そしてイテリメンに変更する

人々が増加する[23)]。イテリメンとの血縁関係を持たない大陸側のカムチャダールがイテリメンの民族籍を取得できたのは，半島でカムチャダールをイテリメンに読み替えた措置がそのまま適用された結果であった（Khakhovskaya 2003：44-62；Sirina 2005：88-94）。

1980年代後半になると，カムチャツカ州の「カムチャダール」は先住少数民族の諸権利を求める運動を起こし，結果として2000年および2002年に，ロシア連邦の法定民族として先住少数民族の諸権利を認められることになった。2002年の国勢調査で自らの民族籍として「カムチャダール」を選択した人は2,293人，このうち全体の82パーセント（1,881人）がカムチャツカ州（当時）に，13.7パーセント（314人）がマガダン州に住んでいる（Federal'naya sluzhba 2004：11, 117-119）。

このような一連の動向に対し，カムチャダールと近い関係にあるイテリメンからは，１つの民族を２つに裂いたという批判の声も上がっている（Murashko 1997：182）[24)]。イテリメンのなかには，カムチャダールを祖先の言語や文化（イテリメン語，イテリメンの民族文化）を喪失した集団だと考え，学習によってそれを取り戻すべきだと考える人もいる。だがそれと同時に，カムチャダールが新たに先住少数民族の枠に入ったことに対しては，天然資源をめぐる新たなライバルの出現として否定的な反応が見られるという（Murashko 1997：182）。

5.3 マルコヴェツ――さまよう民族籍

マルコヴェツ（マルコヴォ人）は，その人口の少なさにも関わらず，カムチャダールに劣らず複雑な民族籍の変更を経験している[25)]。彼らが住むマルコヴォ村は，現在チュコトカ自治管区のアナディル地区に含まれている。この地域に最初のロシア人移住者が現れたのは17世紀中旬のことである。しかし1769年にチュクチとの戦いに失敗したロシア軍がアナディル要塞を廃止すると，ロシア系住民および彼らと関係が深かった先住民族は他地方へと移住した。マルコヴォ村がアナディル川流域に建設されたのは，公式記録では1840年代，ロシア帝国とチュクチの関係が好転した後である。以来マルコヴォ村には，かつてこの地域に住んでいたロシア人古参住民の子孫のほか，先住民族およびヤクート地方などから移住してきたロシア人が集まり，婚姻を介して混交していった。

マルコヴォ村の住民のうち，ロシア人サブグループの一員だとみなされている人々（マルコヴェツ）は，帝政時代以来，主に漁業と狩猟によって生計を立ててきた。彼らはロシア人，ユカギール，チュクチ，エヴェンなどを祖先に持ち，帝政時代の階層も農民や町民，コサック，異族人などと様々であった。現在マルコヴェツの民族籍とされている「チュヴァン」は，ユカギール系の民族の名称である。

住民の自称としては，かつては「マルコヴェツ」の他に「デジニョヴェツ（dezhnevets / dezhnevtsy）」（デジニョフ人）も知られていた。デジニョフ（S. Dezhnev）とは17

世紀にこの地方に遠征してきたコサックたちの隊長であり，1648年にユーラシア大陸最東端（現デジニョフ岬）に到達したことで知られている。デジニョフたちはその後，アナディル川をさかのぼり，現在のマルコヴォ村付近にも要砦を築いていた。マルコヴォ村ではこの探検隊に参加していたコサックたちを，自分たちの祖先とみなす伝説があったという。

今日のマルコヴェツたちは，自らをコサックの子孫とみなすことはあっても，「ロシア人」としての自意識は持たないという。これは近接するサハ共和国の古参住民とは大きく異なる点である（次項参照）。帝政末期の1897年に実施された国勢調査では，マルコヴォ村の住民約300人のうち，半分がチュヴァンとして，また3分の1がロシア人として記録されている（Vakhtin, Golovko and Schweitzer 2004：58）。しかし1920年代の記録を見ると，マルコヴォ村にロシア人は登録されておらず，かわりに「カムチャダール」の名前が登場する。これは帝政時代末期の1909年に，行政区分の変更によってマルコヴォ村がカムチャツカ州に入り，ロシア人の血をひくマルコヴェツも「カムチャダール＝カムチャツカの混血者」と呼ばれるようになったためである。

ところが1930年代にチュクチ自治管区が新しく形成され，カムチャツカ半島でも「カムチャダール」という名称が使用されなくなると，マルコヴェツの民族籍も「チュヴァン」に変更された。しかも1959年になると，このチュヴァンも民族の実体がないという理由で法定民族リストから削除され，マルコヴェツはロシア人またはチュクチに振り分けられることになった。研究者らはこの年の国勢調査に記録された「ロシア語を母語とするチュクチ」534名を，マルコヴェツだと考えている（Gurvich 1992：81）。

マルコヴェツが再び「チュヴァン」に戻ったのは，1989年にこの名称がソ連の法定民族名として復活したためである。2002年のロシア国勢調査では，チュヴァンを自らの民族籍だと回答した者は全部で1,087人存在する。しかしそこにはロシア語を話すマルコヴェツの他に，チュクチに近い文化を持つ人々（トナカイ飼育従事者）も含まれており，両者は互いに「川チュヴァン」「トナカイチュヴァン」と呼んで区別しあっている。またチュクチなど周辺民族の活動家からは，チュヴァンという民族には実体がないという異議申し立てが出ているという。

筆者が知るかぎり，現在マルコヴェツのもとでは，民族籍の再変更を求める組織的な運動は行われていないようだ[26)]。その背景には，これらの集団が明確な民族帰属意識を持たず，またカムチャダールのように自称を民族名として扱われた歴史もないことがあるだろう。また彼らがすでに「チュヴァン」として先住少数民族の諸権利を保障されていることも，人々が新たな民族運動を起こす必要を感じない大きな理由となっているようだ。

5.4 サハ共和国の古参住民――「ロシア人性」をめぐる諸局面

ルスコウスチイネツとポホドチャニンは現在のサハ共和国北部に居住している[27)]。その名前の由来であるルスコエ・ウスチエ村とポホーツク村は，東シベリア海に注ぐインディギルカ川下流およびコルィマ川河口に位置する。両村は17世紀に建設された村で，特にルスコエ・ウスチエ村は長年インディギルカ地方の行政の中心であった。1990年代の両村の人口はそれぞれ200～250人程度である。なおインディギルカ川，コルィマ川流域には他のロシア人古参住民の村もあるので，両村住民と周辺住民をまとめて「インディギルシチク（indigirshchik / indigirshchiki）」（インディギルカ人），「コルィムチャニン」「コルィムスキー（kolymskii / kolymskie）」（コルィマ人）と呼ぶこともある。

ルスコウスチイネツとポホドチャニンは，ロシア人のほかにチュクチ，コリャーク，ユカギール，エヴェンなどの血をひいている。しかし彼らはカムチャダールやマルコヴェツと異なり，ソ連初期から現代にいたるまで常にロシア人とみなされてきた。ただしこれは上からの分類であり，帝政時代の住民たちは民族よりも階層や地域にアイデンティティを感じていたという。かつてルスコウスチイネツは全員が町人階層に属していたが，ポホドチャニンの階層は町人のほか，農民，聖職者，コサックなど様々であった。

ソ連時代になって北方開発のために多くの新移住者が流入すると，古参住民らは新しい住民たちによって彼ら（上位）と周囲の先住民族（下位）との中間に位置づけられることになった。古参住民の主たる生業は昔も今も漁業であり，周囲の先住民族との差異も小さかったが，公的には「ロシア人」であったため，帝政時代の「異族人」やソ連時代の「北方少数民族」に与えられた援助や権利は享受できなかった。それにもかかわらず彼らは，北方開発や国境警備のために他の地域から来た人々からは「地元ロシア人（mestnorusskii）」と呼ばれ，「本当のロシア人」から区別されたという。しかしこのような「蔑称」もまた，時とともに古参住民の帰属意識の１つになっていった。

マルコヴェツの場合と同じく，ルスコウスチイネツ，ポホドチャニンのもとでも民族籍を変更する動きはほとんど見られない[28)]。それどころか両者の場合には，ペレストロイカ期以降，ロシア人性の強調という民族籍変更とは逆方向の動きが報告されている。たとえば1988年には，シベリアのロシア人作家ラスプーチンのバックアップを受けて，「ルスコエ・ウスチエ村創設350周年記念祭」が開催されたが，このなかではルスコウスチイネツが「最初のシベリア開拓者」の子孫であり，古いロシアの伝統文化の保持者であることが強調されたという。

同様の試みは現在でも郷土誌家や文化行政担当者が中心となって，学校教育やドキュメンタリーフィルムの撮影を通して実行されている[29)]。しかし外部の研究者であるヴァフチンらはこの試みの成果を疑っている。というのは両村の住民自身はまさに「地元住民（mestnyi）」や「地元ロシア人」であることを強調する傾向があるからだ。また自

らの「ロシア人性」に対する懐疑は，ルスコウスチイネツよりも混血が進んでいるポホドチャニンのもとで，より強く見られるという（Vakhtin, Golovko and Schweitzer 2004：94）。

5.5 土地への帰属意識と隣接諸民族からの反発

ロシア極東・極北部の4集団のあいだでは，ロシア人の祖先を持つことへの誇りが，「最初のシベリア開拓者」や「コサック」の子孫であるという形で表現されている。だがそれ以上に彼らが重視しているのは，居住地との一体感（地元性）である。彼らは新移住者と先住民族とのあいだの中途半端な位置にあって，民族帰属よりも土地への帰属に自分たちのアイデンティティを見出しているのだ。

しかし彼ら「ロシア人サブグループ」が自分たちの存在の固有性を強調し，居住地との結びつきに由来する先住民族としての地位を要求するとき，隣接する先住諸民族からは強い反発が示されている。現在ロシア連邦北方に居住するロシア人サブグループ（4集団およびヤクチャニン，ウスチ・エニセエエツ（ust'-eniseets / ust'-eniseitsy），ザトゥンドレンヌィ・クレスチヤニン，カニンスキー・ポモール，メゼネツなど）のうち，先住少数民族の地位を保障されているのは，おそらく本節で取り上げた4集団だけである。ところがソ連崩壊直後の1993年にはすでに，これら北方集団全部を先住少数民族枠に含める案が，民族学者や法学者によって提出されていた（Sokolova, Novikova and Sorin-Chaikov 1995）。この原案は同年の北方先住少数民族協会第1回大会でも承認された。しかしその後「先住少数民族」側の強い反発を呼び起こし，実現にはいたらなかったという（Vakhtin, Golovko and Schweitzer 2004：104）。

近年ロシア経済は好調だと言われているが，農村地域の生活は依然苦しい。そのなかで「先住少数民族」に関する運動は，民族の正統性やアイデンティティをめぐる闘いであると同時に，天然資源という限られたパイをめぐる地域住民同士の競争として立ち現れてくるのである。

6 ヨーロッパ・ロシアにおける「民族」運動

6.1 コサック――階層か，民族か

ヨーロッパ・ロシア（ロシア・ヨーロッパ地域）で一定の動向が観察される2つのロシア人サブグループ，コサックとポモールは，対象となる人々や地域の範囲の広さ，また州や辺区を単位とする地方行政との結びつきという点で，ロシア極東・極北部の諸集団とは大きな違いがある。そのなかでもコサックは，ヨーロッパ・ロシア南部を中心としつつもシベリア，極東にいたる広範な地域に居住すること，またロシア史において重要な位置づけを持つことから，ロシア内外を問わず注目度が高い集団である。

3.2で解説したように，コサックとは帝政ロシアの特殊な軍務階層であった。コサックは14～15世紀頃にヨーロッパ・ロシア南部およびウクライナで形成され始め，その優れた戦闘能力や騎馬技術で知られるようになった。形成期のコサックは国家に縛られない自由の民であったが，徐々に国家の支配や規制を受けるようになり，17世紀のラージンの乱，18世紀のマゼパやプガチョフの乱を経て，ロシア帝国陸軍に取り込まれていった。軍務を負うことになったコサックは，ロシア帝国の拡大とともにシベリア，ロシア極東を含む全国の国境地帯に配置され，主に国境警備や領土拡大，治安維持の任に就いていた。ロシア革命直前の1916年には，全国に12あったコサック軍団およびヤクーツク連隊等に，男女合わせて約450万人がコサックとして登録されていた（Pronshtein and Khmelevskii 1973；植田 2000）。

コサックおよびその子孫は，自意識の高さで知られてきた。帝政時代，コサックは一般住民にはない恩恵を享受していたために特権意識が強く[30]，専制とロシア正教への忠誠心が強いと言われてきた。しかしコサック内部の民族的，宗教的構成は実のところ相当に多様であった。最初期のコサックたちが雑多な人々の集合体であったことは有名であるが，17世紀以降にもコサックの絶対数の不足を補うために，一般農民や東スラブ系以外の民族（カルムィク，バシキール，ブリヤート，エヴェンキなど），さらには流刑者たちがコサック階層に加えられていった。その結果，帝政末期のコサック約450万人のうち約２割にあたる100万人は，ロシア語以外を母語とする人々であった（植田 2000：197）。またドンやウラルのロシア人コサックのあいだでは古儀式派教徒も少なくなかった。

1917年のロシア革命後，多くのコサックが内戦やコサック弾圧政策によって命を落とし，また外国への亡命を余儀なくされた。コサック軍団は解体され，残されたコサックたちも完全に過去の存在となっていった。しかしペレストロイカ政策が始まると，コサック復活の兆しも見え始めた。コサック誕生の地であり，かつ帝政末期にはドン（150万人）やクバン（137万人）などの大規模軍団が配置されていたヨーロッパ・ロシア南部を中心に，コサックの名誉回復を目的とする動きが活発化したのである。ソ連が崩壊すると，コサックを味方につけたいエリツィン・ロシア大統領の支持のもと，12のコサック軍団の復活と軍事利用が急速に進んだ。1996年には大統領直属のコサック軍総局を設置する大統領令が発表され，「コサックの復活」が国際的な注目を集めた（植田 2000：173-289）。

このような流れのなかで，コサックが独立した民族であると主張する声も徐々に大きくなっていった。この主張が登場するきっかけの１つとなったのは，1991年にロシア共和国最高会議が採択した「抑圧された諸民族の名誉回復に関する共和国法[31]」である（Arel 2002：819；植田 2000：244, 246-249）。この法律の第２条では，抑圧された諸民族（narod）の範囲が「民族（natsiya），民族体（narodnost’）[32]，または民族グルー

プ（etnicheskaya gruppa）およびその他の，歴史的に形成された文化的，民族的に共通した人々の集団，たとえばコサック」と定義されており，コサックが公認民族と同レベルで言及されたのだ。もしコサックが民族ならば，ロシア連邦内で一定の政治的，文化的自治権を要求することができる。しかしこの法律はコサックを「民族」だと認定しているわけではなく，土地や自治に関する権利も一般法の制約を受けることになっていた。そのためコサックを民族だと主張することで，コサックの「権利」の回復を求める動きが活発化したのである。

2002年の国勢調査でも，コサックの活動家たちは自らの集団が民族として扱われることを要求したが，国政調査の民族籍リストを作成していたモスクワの民族学・人類学研究所はそれに反対した。また国勢調査実施時には，コサックを「民族グループ」として特別扱いするかどうかは決められていなかった。しかし調査に先立って，タタールのサブグループであるクリャシェン（kryashen，ロシア正教を受容したタタール）を，自己決定の原則に従って別記するという決定が下されていたため，クリャシェンの分離に反対するタタール民族活動家からは，コサックに自己決定の原則を認めないのは不適切だとする批判の声があがった。つまり，他民族（タタール）の分離傾向は促進させながら，自民族（ロシア人）の分離主義を認めないのはダブルスタンダードだというのだ（Arel 2002：817-819）。

最終的に，コサックは独自の民族とは認められなかったが，ポモールとともにロシア人の「民族グループ」とみなされ，「民族」に準じる特別扱いを受けることになった[33]。そのこと自体はコサック運動の成功の１つとみなすことができるだろう。しかし調査の結果明らかになった「コサック」人口は，活動家たちの期待を裏切るものだった。調査前には，ロシア国内のコサックの子孫（300～500万人）のうち，150万人程度が自らの民族帰属としてコサックを選択すると予想されていたが（Khoperskaya 2005），最終的な回答者は約14万人にとどまった。

コサックの回答数が活動家たちの期待ほど伸びなかった理由は大きく分けて２つある。第１の理由は，関係者のあいだで民族籍欄に「コサック」と記入することへの抵抗感が強かったことだ。ソ連および現在の民族概念を身につけた人々にとって，従来の民族籍（ロシア人，ウクライナ人など）を否定してコサックを選択することは，違和感を覚えずにはいられないことであった。また年配者のなかには，ロシア革命後に実施されたコサック弾圧の辛い経験から，コサックだと名乗ることを躊躇した人が多かったという（Filippova et al. 2003：272）。

第２の理由は，コサック運動の地域差に求められる。今回の国勢調査では，民族籍としてコサックを選択した人がロシア連邦のほぼすべての連邦構成主体（州，辺区，共和国，自治管区など）に住んでおり[34]，他の諸集団と比較してコサックの自意識が高いことが再確認された。だが内訳を見ると，その大半（95.5パーセント）はヨーロッパ・ロ

シア南部に集中し，なかでもドン・コサック軍団の中心地であるロストフ州での回答が，全体の62.5パーセント（約８万7,500人）を占めていた（Federal'naya sluzhba 2004: 25-122）。

コサック運動に地域間格差が生じたのは，諸軍団の成立過程や規模など，地域ごとの性格の違いに起因する部分が大きい。ロシア・コサックの歴史的中心地である旧ドン・コサック軍団地域で運動がもっとも盛り上がっているのは，当然のことであろう。だがそれに加えて，そもそも各地域の関係者のあいだでコンセンサスを形成する努力が不足していたという意見もある。ロストフ州の動向を観察したグセフ（K. Gousseff）は，ロストフ市における地域主義的傾向の大きさとともに，近隣州を含む他地域との連携姿勢が不足していたことを指摘している[35]（Filippova et al. 2003: 269-270）。

6.2 民族性の二重解釈 ── ポモール

ポモールは2002年の国勢調査でコサックとともにロシア人「民族グループ」の扱いを受けたが，その知名度はロシア国内でも低い。ポモールとは，ヨーロッパ・ロシアの白海沿岸地方（ポモール地方：現アルハンゲリスク州，ムルマンスク州など）に住む人々の自称，および他称である。元来この地域にはフィン・ウゴル系諸民族が居住していたが，彼らは後に南方から進出してきたロシア人に同化していったと言われている。その後この地域がロシアとヨーロッパをつなぐ北極海航路の重要拠点として繁栄すると，住民のあいだにも「ポモール」（沿海地方人）としての自意識が形成されていった。しかし18世紀初頭にバルト海沿岸にサンクト・ペテルブルグが建設されると，ロシアからヨーロッパへのルートが変化し，この地域の経済力も急速に失われていった。沿海地域という土地柄，ポモールのあいだでは漁業や造船，海洋貿易など，海に関する職業が発達していた。またこの地域は，古儀式派の一派である「ポモール派」という比較的大きな宗派が発達したことでも知られている（Bernshtam 1983）。

これまで民族学者はポモールを，生業の特殊性こそあれ完全にロシア人の下位集団だとみなしてきた。したがって独立した「民族」としてのポモール論は，ポモール「民族」運動の担い手によるものと（Obshchina pomorov 2008），その批判とに分けられる。後者の論考はまだ少ないが，代表的なものに，フィン・ウゴル系諸民族を研究しているシャバエフが行った分析がある（Shabaev 2006）。本項では，ポモール運動の活動家たちの言説にも注意を払いつつ，シャバエフの分析に沿って，ポモール運動の全体像を概観したい。

シャバエフはポモール運動を，1980年代後半から盛んになるフィン・ウゴル系諸民族の「新しいアイデンティティ」獲得運動のなかに位置づけている。彼によれば，ポモール運動は20世紀初頭にほぼ消滅したポモール・アイデンティティを復活させることで，２つの大きな目標を達成しようとしている。その１つはポモールが母語や生業，その

他の「民族」文化を維持できるように，先住少数民族と同等の権利を獲得すること，もう１つはポモールの歴史的，文化的遺産を強調することによって，アルハンゲリスク州全体の発展をめざすことである。前者は主に沿岸部の漁業従事者が対象となるが，後者の構想には都市部のほかに，隣接するムルマンスク州やヴォログダ州まで含むことがある。

このような運動が起こった背景には，国際社会のなかで天然資源に対する先住民族の権利が重視されるようになってきたこと，またソ連崩壊後に地域の分権化が進むなかで，ロシア各地で地域主義的傾向が高まったことがあるという。現在のポモール運動は特定の活動家たちだけが牽引しているのではなく，アルハンゲリスクを中心に地元の郷土誌家や教員の幅広い共感に支えられている。しかしそれ以外に，州知事や市長など，地域の政治エリートの関心とも結びついていることが，この運動の特徴の１つである。

ポモール運動にはさらにもう１つ，興味深い特徴がある。それは，ポモールが独立した民族である根拠を，フィン・ウゴル系民族との混血と，「古代ロシア人（drevnerusskoe naselenie）」との関係の両方に求めることである（Shabaev 2006：20）。「古代ロシア人」とは主に，10〜16世紀に国際商業都市として栄えたノヴゴロドの住民を指している。ポモール協会のエシポフは，ポモールはロシア帝国の拡大によって形成された「ロシア民族（russkii）」そのものではなく，モスクワによるルーシ（ロシアの古い名称）統合以前の北方の伝統を受け継いだ集団であると主張している（Obshchina pomorov 2008）。

ところがシャバエフが指摘するように，フィン・ウゴル的要素はポモール運動のなかで形式的に言及されるだけで，実際の重点は古代ロシア性に置かれている。ポモールの民族性に関するこの「二重の理解」（Shabaev 2006：21），ないしは二重の解釈からは，先住権を主張しつつも「ロシア文化」のコアにとどまろうとする，ポモール運動の活動家たちの戦略を読み取ることができるのだ。

ただしこのような考え方は，あながち珍奇なものとはいえない。19世紀以来，ポモール地方を含むヨーロッパ・ロシア北部（いわゆる「北ロシア」）は，フィン・ウゴル系諸民族の文化的影響を受けた辺鄙な地域とみなされると同時に，英雄叙事詩（ブィリーナ）などの古い文化要素を残す土地として，ロシア民族の心の故郷というイメージも担わされてきた[36]。ポモール運動の理論の一部は，このような思考パターンを，民族認定運動に再利用したものだといえるだろう。

ポモール運動がロシアおよび全世界に知られるようになったきっかけは，おそらく2002年の国勢調査である。このとき民族籍としてポモールを選んだ人は6,571人で，コサックと比較すると格段に少なかった。また回答者の96パーセントがアルハンゲリスク州に集中しており，ポモール運動の支持が同州を越えて拡大していないことも明らかとなった。しかしそれでも，「ポモール民族」の存在が「統計的現実」（Shabaev 2006：22）

になったことは，賛同者にとっても，また反対者にとっても，大きな意味を持っていた。

国勢調査以後，ポモール運動はますます勢いを増しているようだ。2003年にはアルハンゲリスク市でポモールの民族文化自治が認められた。また2004年には「アルハンゲリスク州ポモール先住少数民族共同体」が公式に登録されて，「法的現実」となった（Shabaev 2006：20, 22）。しかし先住少数民族への認定に関しては，成果があがらぬまま今日にいたっている。2007年４月にはロシア連邦農業省から「北方水産地域での漁業規定の承認に関する法令[37]」が出され，ヨーロッパ・ロシア北部での漁業に様々な制限が加えられたが，ポモールにはネネツなどの法定先住少数民族と同等の漁業権が認められなかった。このような状況下で，ポモール活動家たちは，混血集団としてのカムチャダールとポモールとの共通点を強調することで，ポモールも独立した民族として認められるべきだという主張を展開している（Esipov 2007）。

6.3 地域主義と民族運動の結合

コサックとポモールの民族認定運動には，いくつかの共通点がある。まず両運動では，自集団が「民族」または「先住少数民族」に準ずるものだと主張することで，生業（漁業または軍務）に対する権利の獲得を目指している。またこれらの運動は，比較的広域を対象としており，地方行政とも結びついて地方活性化運動の様相を呈している。

これらの特徴は，両運動が地域主義と民族運動の結合であることを物語っている。つまりソ連崩壊後の経済の低迷と人口流出に苦しむ地方が，「民族」という枠組みを利用して中央政府から経済的，文化的権利を確保し，疎外された状況を打開しようとしているのである。カムチャダールら極東諸集団の場合，「民族」運動のなかで自らと比較する集団は，イテリメンなど，民族共和国を持たない小民族（いわゆる「ナロードノスチ」）であり，したがって政治的自治への願望も自ずと小さい。これに対して，州や辺区といった大きな行政区単位との結びつきが強いコサックとポモールの運動では，程度の差はあるにせよ，連邦制度のなかで州・辺区と同程度の位置づけにある民族共和国とその権限が意識されている[38]。

もう１つ，両集団の「民族」運動に共通する特徴として，ロシア的要素の扱い方を挙げることができる。コサック，ポモールの活動家とも，自集団のなかのロシア的要素を否定しないばかりか，古代ルーシやロシア帝国との結びつきを強調することで，ロシア人内での自集団の地位を高めようと試みている。このことはロシア極東の諸集団にも部分的には当てはまる。しかしルスコウスチイネツらのあいだでは，ロシア人性の強調と先住少数民族の諸権利の要求とは，両立しないことが自覚されていた。それに対してコサックやポモールの運動は，両者を同時に強調する点に大胆な思考の割り切りがある。コサックとポモールにとって非ロシア人の血筋は，現在進行形の事実ではなく伝説，すなわち「フィクション」なのである。そこには，ヨーロッパ・ロシアに居住する集団だ

からこそ持つことができる，ロシア人のメイン・ストリームの歴史・文化の形成に直接関わってきたという自負と余裕を見出すことが可能だろう。

7 ブリヤート共和国のロシア人

7.1「民族」運動への関心の薄さ

ブリヤート共和国は隣接するザバイカル辺区（旧チタ州）[39] とともに，バイカル湖の向こう側の土地，すなわちザバイカル地方と呼ばれている。この地方は中国およびモンゴルと隣接しており，モンゴル系のブリヤートやツングース系のエヴェンキが居住している。ザバイカル地方がロシア領になるのは17世紀後半のことであり，以来ロシア人およびその他の移住者が入植することで，ロシア化が段階的に進んでいった[40]。

ザバイカル地方のロシア人は，移住年代や信仰，階層の違いなどによっていくつかに分類される。ブリヤート共和国でよく知られる分類は，「古参住民」と「新住民」（novosel），コサック，そして古儀式派教徒のセメイスキーである（Zateev 2002：46–169）。古参住民とは17～19世紀末までの移住者を，新住民はそれ以降の移住者を指す用語である。ただしこの地域では，固有の呼称を持つコサックとセメイスキーを古参住民に含めない習慣がある（Petrova, E. V. 2001：42–43）。本節でもこれに従い，「古参住民」を狭義で用いることにする[41]。

本章3.2で概観したように，コサックとセメイスキーは，ソ連時代からロシア人サブグループとみなされてきた。コサックたちがザバイカル地方へ居住し始めたのは17世紀中葉のことである。以来彼らはロシア革命時まで国境警備の任に就いてきたが，その内部構成は常に変動していた。コサック集団からは古参成員が帰農によって離脱することがあり，また人員不足の際には，他地方のコサックや非コサック・ロシア人，そして現地のブリヤートやエヴェンキ（「ツングース」）が編入されてきたからである。特に1851年にシベリア，ロシア極東で最大規模（1916年時点で27万人）となるザバイカル・コサック軍団が創設されたときは，地元の農民，そして流刑囚が新コサックとして大勢編入されている。19世紀末の統計によると，ザバイカル州に住む軍団帰属コサック19万5,000人中，約60パーセントが新コサックで（Komissiya 1898：54–55），約14パーセントがブリヤート語，モンゴル語，エヴェンキ（ツングース）語を母語とする異族人コサックだった（Troinitskii 1899–1905：vol. 74, 162–163）。なおブリヤートをはじめとする先住民族とロシア人との混血は，古参コサックと古参住民の両方に共通している（Bunak and Zolotareva 1973；伊賀上 2003c, 2005）。

古儀式派教徒セメイスキーは，3.2で触れたように，18世紀後半に当時のポーランド領から東シベリア開発のためにザバイカル地方へ強制移住させられた人々の子孫である。ある計算によれば，1930年代のセメイスキーの人口はザバイカル地方全体で７万人，

そのうち５万人がブリヤート・モンゴル自治共和国（現ブリヤート共和国）[42] に住んでいた（Dolotov 1931：16）。ソ連時代のセメイスキーは反宗教政策の影響で宗教離れが進み，かつて信仰で禁止されていた非古儀式派教徒との結婚も一般化した。そのため現在は，セメイスキーと非セメイスキーの境界は以前ほど明確ではない（伊賀上2003a；2003b；2006）。

このように，ブリヤート共和国のロシア人には古参性，混血，古儀式派の信仰，コサックなど，特徴的な要素を持つ諸集団が多いため，今日にいたるまで住民のあいだで諸集団の違いが意識されている。なかでも集団として比較的まとまりがあるセメイスキーとコサックのもとでは，1980年代後半から自集団に関する文化活動や政治活動が活発化してきた（Vasilevskii and Perminov 2002：17；Petrova, E. V. 1999：107-111；伊賀上 2007）。だがこれら両集団においてさえ，自集団をロシア人とは異なる独自の「民族」であると強調する傾向はほとんど見られない。

6.1で述べたように，2002年のロシア国勢調査で「コサック」を民族籍として回答した者はヨーロッパ・ロシア南部以外ではきわめて少なかったが，そのなかでも特にザバイカル地方の反応は小さく，回答者数はブリヤート共和国で51人，チタ州で32人にしかならなかった（Federal'naya sluzhba 2004：96, 111）。もちろん，コサック運動の活発さを，国勢調査での回答者数だけで単純に計算することはできない。しかしザバイカル・コサック内部の多様性や軍団としての歴史の浅さが，コサックの子孫たちの一体感を弱めている可能性は否定できない。またこの地方では，コサックの「愛国心」が刺激されるような民族対立や国境紛争が生じていないことも，考慮に入れるべきだろう[43]。

セメイスキーもかつては，周辺住民からロシア人とは別の集団だとみなされることがあった[44]（伊賀上 2003b：63-64）。しかし現在のセメイスキー運動には，古儀式派教徒が「古代ロシア」，あるいは「ピョートル１世時代以前」（17世紀以前）の伝統の保持者であると主張することで，ロシア人としてのセメイスキーの正統性を強調する傾向が見られる（Pozdeeva 2001：6）。またポモール運動がフィン・ウゴル系先住民族との混血を重視するのに対して，セメイスキーのあいだでは古参住民と比較した場合の「純血性」が意識されている（伊賀上 2003c：177-179）。

ブリヤート共和国に住む他の集団，すなわち古参住民や「カルィム」（洗礼ブリヤートを祖先に持つ人々）のあいだでも，今のところ民族籍の変更を求める大きな運動は起こっていない。その理由はいくつか考えられるが，特に重要なのはこの地方における農業移住者の多さであろう。農耕に適していたザバイカル地方では，帝政時代をとおして多くの新移住者が流入したため，ロシア極東・極北部のように古参住民が他のロシア人から孤立する状況が生じにくかった[45]。またロシア人との交流が多かったブリヤート自身が，ソ連時代から現在にいたるまで「先住少数民族」に認定されたことがなく，ブリ

ヤートとの混血の事実が「先住少数民族」の諸権利の獲得に結びつかないということも，「民族」運動への関心の低さと無関係ではないと思われる[46]。

7.2「先住性」と「古参性」の新解釈

このようにザバイカル地方，なかでもブリヤート共和国のロシア人集団のもとでは，独自の民族籍や権利を求める運動はほとんど観察されていない。それどころか政治的，学術的局面では，むしろロシア民族としての一体性が強調される傾向がある（Petrova, E. V. 2001；Zateev 2002）。その理由としては，かつて（特に第2次世界大戦前まで）ロシア人諸集団間に差別意識や細分化志向があり，ソ連時代からその解消が大きな課題とされてきたこと，その結果として現在では各集団が血縁的にも文化的にも近接してきたことが挙げられる。

しかしブリヤート共和国で刊行されたロシア人研究者の著作を読むと，この傾向の背後には民族共和国という枠組みへの懸念があることに気づかされる。ブリヤート共和国のロシア人は，共和国総人口の70パーセントを超えており，数の上では圧倒的多数派である。それにもかかわらずロシア人は，民族共和国のなかで疎外感を覚えている[47]。2002年にブリヤート国立大学から刊行された学術書，『ブリヤート地方のロシア人』（Zateev 2002）は，ロシア人のそのような意識を反映したものである。

この本はブリヤート国立大学の社会学者ザテエフらが中心となって，共和国のロシア人社会の全体像を，歴史，職業構造や教育，文化，言語活動の面から総合的に示そうとしたものである。その個々の内容は既存の共和国関連書と大差ないが，民族共和国を単位としてロシア人社会の全体像を描こうとした点が，斬新である[48]。

編集者のザテエフによれば，地方（特に民族共和国）でロシア人全般を研究対象とすることはソ連時代から困難が伴っていたという。その理由は，ロシア人が全連邦レベル，少なくとも全ロシアレベルのテーマだと考えられていたために，その研究には国の中心的研究機関（モスクワや，科学アカデミー・シベリア支部など）が従事すべきであると考えられていたからだ（Zateev 2002：14-15）。たしかに，ロシア人研究には全国的な（ときに世界的な）視座が必要である。しかしここで本当に問題とされているのは，ソ連およびロシア連邦内における民族共和国の位置づけである。つまり民族共和国は，共和国と同じ名前を持つ民族にとっては民族統合と自治の象徴であるが，まさにそれゆえに，連邦制の象徴であるロシア人を語る単位ではないということだ[49]。ザテエフらの不満は，共和国内でロシア人が主役になれないことにあるのだ。

この本で展開されるザテエフの主張のうち，本稿との関係で特に注目したいのは，彼が「先住性」や「古参性」の概念の新しい解釈を提唱していることである（Zateev 2002：23-29）。これまで見てきたように，民族政策・運動のなかでは，「コレンノイ（korennoi）」（先住の）という形容詞はロシア人以外の民族を指して使用されることが

多い。だがこの言葉は本来「地元の，生粋の」という意味も持つことから，日常会話ではロシア人に対しても用いられている。ザテエフらが2002年に行ったアンケート調査でも，46.6パーセントのロシア人が自らを「共和国のコレンノイ住民（korennoe naselenie）」だと回答し，そうではないと答えた22.4パーセントを大きく上回ったという。これを受けてザテエフは，「コレンノイ」という言葉を非ロシア人先住民族だけに使うこれまでの用法を改めるべきだと主張する。彼はその理由として，この言葉の用法がソ連時代初期（1920年代）の「現地化（korenizatsiya）」（現地民族幹部を養成して優先的登用する方針）という政治用語の影響を受けていること，またこの地に代々200年以上住み続けるロシア人住民は，すでに「地元住民」と呼ばれる資格があること，またロシア人に対して使用されることがある「非コレンノイ（nekorennoi）」という形容詞は，「主要ではない，一時的な」という否定的なニュアンスを持つことを挙げている[50)]。

ザテエフはまた，「古参住民」という用語についても，その範囲を3世代前にブリヤート地方に移住してきた人々全体に拡大するべきだと主張する。彼はロシア人集団を帝政時代の移住者とソ連時代の新移住者に区別することで，後者の居住権が脅かされることを懸念している。ザテエフが計算したところによれば，セメイスキーとコサックを含む古参住民の割合は，これまでの定義に当てはめると共和国在住ロシア人の3分の1にしかならない。だが新しい定義を適用すれば，その割合が3分の2まで増加するという（Zateev 2002：23-24）。

ザテエフの展開する「先住性」と「古参性」のロジックは，一見ありふれた主張である。しかしソ連時代に多くの新移住者が流入した地域（シベリア，カフカス地方，バルト諸国や中央アジアなど）では，先住性や古参性の評価はむしろ低かった。ソ連時代の新住民たちはしばしば大都市や国家との結びつきの強さによって，「地元住民」と同等か，あるいは上位に立っていた。5節で紹介したサハ共和国のルスコウスチイネツ，ポホドチャニンを新移住者たちが「地元ロシア人」と呼んだことは，その典型的なケースである。

「古参性」の復権は，今回取り上げたシベリア，ロシア極東以外でも，1980年代後半から観察することができる。民族学研究では，19世紀末～20世紀初頭に中央アジアへ移住した東スラブ系（ロシア人，ウクライナ人）農民や，19世紀にザカフカス地方へ強制移住させられたモロカン派教徒やドゥホヴォール派教徒など，帝政時代末期の移住者を，ソ連時代の新移住者と区別して考察する研究が登場している（Brusina 2001；Kozlov 1995）。1960年代以降，ソ連邦構成共和国間の交流が急激に進むなかで，国内移住者が急激に増加したが，そのような「新参者（priezzhii）」たちはソ連崩壊後に大挙して故郷へ，よりよい地域へと去っていった。そのなかで逃避すべき故郷を持たない「地元住民」に光が当てられるようになったのだ。

さらに近年では，移住地に残った「新参者」たちのあいだからも，自らを「地元住民

（mestnyi）」であるとみなし，その「先住性（korennnost’）」を主張する声が出ていることが報告されている（Thompson 2003）。トンプソンによるこの観察は，マルコヴェツの居住地でもあるロシア最東端チュクチ自治管区のものであるが，そこでは長年住み慣れた土地への愛着や定住の覚悟（これは他の地域の「新参者」の多くに共通している）だけではなく，地域独自の事情も大きな意味を持っている。

チュクチ自治管区では，2000年に行われた知事選挙で，完全に外部の存在であったモスクワの大実業家（新興財閥（オリガルヒ））ロマン・アブラモヴィチ（R. Abramovich）が当選した。彼は知事に就任後，種々の改革を進めたが，その結果，ソ連崩壊後の新しい価値観を身につけたモスクワや他地域のエキスパートたちが地域行政や産業の中核を担うようになり，街にはトルコなどから来た外国人建設労働者たちがあふれた。そのため，かつては国家や都市の最新の意向を体現していたソ連時代の「新参者」らは，新しい時代に適応できない，遅れた「地元住民」という立場へと追いやられたというのだ。ある時代の新移住者が，新たな移住者の出現によって古参住民化していくことは，普遍的な現象ではある。しかしチュクチ自治管区のケースは，「先住性」や「古参性」の解釈が単に居住年数の長短だけではなく，住民構造に大きく依存していることを示している。

ロシア連邦や旧ソ連地域に見られる先住性や古参性の価値上昇は，とりもなおさず，ソ連邦構成共和国の独立やロシア連邦内の自治共和国・自治管区の主権化，そして先住少数民族基本法の制定などによって，「先住者の権利」を重視する傾向が生まれたことを反映している。また国家による地方の監視と援助が激減し，各地方自治体に自助努力が求められるようになって地方の権力が相対的に増大したことも影響しているだろう。何の手当ても支給してくれないモスクワとのつながりよりも，現在住む土地での人的ネットワークや経済的権利のほうが，生き残り戦略の上で重要な意味を持つようになったのである。

ブリヤート共和国における「ロシア民族統合」の主張は，コサックやポモールの「分離」の主張とは反対のベクトルを持つように見える。しかし地位の向上をめざす人々による「先住」権に基づいた権利獲得運動という点では，両者は近接した現象なのだ。

8　結論

以上，ポスト社会主義時代のロシア連邦において，ロシア人サブグループをめぐるいくつかの動向を分析してきたが，そこには大きく分けて２つの特徴があった。第１は民族の枠組みへの注目であり，それはロシア民族からの「分離」または「統合」という２つの方向で発現していた。第２は「先住性」，「古参性」の強調であり，分離と統合のどちらの主張にも共通して観察された。

これらの動向は，「諸民族の独立」に対するロシア人側の反応が形をとったものだと

考えることができる。その一方で興味深いのは，分離を主張する集団，たとえばコサックやポモールが必ずしも「ロシア人性」（ロシア帝国と古代ルーシ）を否定せず，むしろそれを強調していることである。2002年の国勢調査の動向を分析したアレルは，カフカス地方の新聞からソ連時代の知識を身につけたコサック・リーダーの意見を引用している。それによると，この人物はコサック集団を民族とする科学的根拠がないと知っているが，あえて国勢調査では民族籍をコサックと回答したと述べているという（Arel 2002：819）。

この発言に象徴されるように，本稿で取り上げた諸集団をめぐる運動の多くは，「民族籍」や「先住性」という概念を利用した，多分に確信犯的な政治運動という性格を持っていた。一方で一般の人々の反応には，国家や知識人によって定義される「民族」という枠組みや，それを利用した民族運動への違和感も表れていた。このことは，民族による分類が日常生活のなかで必ずしも最優先される要素ではないこと，人々が国家による民族分類の恣意性を理解していることを意味している[51)]。

しかしながら現在のロシアでは，「民族籍」の不自然さや問題点を指摘すること自体，すでに別の政治的傾向を帯びることになる。プーチン政権下のロシアでは，州や辺区，共和国に対する連邦政府の影響力が増大し，2003年からは連邦政府主導の新しい地域統合策が開始され，民族自治管区が州や辺区へ合併・廃止される動きが加速している。7.2で紹介した『ブリヤート地方のロシア人』の冒頭に，ブリヤート共和国大統領ポタポフ大統領（2007年6月退任，ロシア人）が挨拶文を寄せているのだが，その表題が「われわれの故郷は1つ，ロシアだ」であることは，きわめて示唆的だ。このような風潮のなかで，既存の民族的枠組みへの違和感の申し立ては，「国民」としての統一感を促進し，政治の中央集権化を進めるためにも利用されうることを指摘しておきたい。

今後ロシア連邦におけるロシア人およびその他の人々が，いかなる帰属意識を重視していくようになるか，現時点で判断することは難しい。今後チュクチ自治管区のように中央による天然資源の開発が強化される地域が増えれば，先住民族と移住者のあいだの対立とともに，「資本主義・グローバリズム・モスクワ」対「ソ連的価値観・地方主義」の確執が顕著になる可能性はある（Thompson 2003）。旧ソ連地域および他国に住むロシア人集団とロシア連邦との関係にも，注意を払う必要がある。しかしどの場面においても，民族と国籍，そして地域という3つの要素の関連に注目し，その変化を追跡していくことが重要であろう。

注

1）ブリヤート共和国での調査は，2001～2004年，および2007～2008年のあいだに計7回，延べ6ヶ月にわたり，ウラン・ウデ市およびタルバガタイ地区，ムホルシビリ地区，ビチュラ地区，カバンスク地区にて実施した。調査にあたっては，2002年度東北開発記念財団・海外渡航助成，2003～2004年度および2006～2008年度科学研究費補助金（若手研究（B）研究課題「シベリア民族混住地域における農村ロシア人の社会集団再編と自他認識の変容過程」，基盤研究（B）研究課題「旧満州農村のロシア人住民」（研究代表者・阪本秀昭））から助成を受けた。また調査の一部は，モンゴル学・仏教学・チベット学研究所（在ウラン・ウデ）の上級研究員S・G・ジャンバロヴァ氏と共同で実施した。

2）シベリア，極東などの入植地域では，ウクライナ出身者が「本来」の民族意識を喪失し，多数派であるロシア人等に同化しやすかったことが知られているが，ベラルーシ出身者では信仰の違い（ロシア正教か，カトリックか）が民族意識に大きな影響を与えたことも報告されている（Argudyaeva 1997：47, 132–133；Lamin and Stashkevich 2000：102–138）。

3）ロシア正教には，国教に認定されていた主流派（官許）教会（ニコン派）と，彼らから「異端」として迫害されてきた「古儀式派（旧教派，分離派）」がある。しかし本稿では煩雑さを避けるために，前者のみを「ロシア正教」「正教会」と呼ぶ。

4）ブリヤートの階層移行の例はジャンバロヴァの研究（Zhambalova 2000：16）を参照。ただし異族人から農民や町人へ移行すると税制や兵役上の義務が重くなるため，異族人階層の者が必ずしも他の階層への移行を望んでいたわけではない。また政府はヨーロッパ系住民が異族人範疇に入ることを「禁止」していたが，そこにも例外が存在した（本章3.2参照）。1897年の国勢調査に基づく諸民族の階層別割合は，カペラーの著書（Kappeler 2001：402–403）を参照。

5）たとえば，ソ連時代のバルト3国における民族間結婚と子どもの民族籍の選択についてはテレンチエヴァ論文（Terent'eva 1969）を参照。

6）この論文集は1989年にロシア沿ヴォルガ地方のウファ市で開催された学術会議，「ソ連における民族学的グループと民族グループ，現代の民族文化プロセスにおけるその役割」の成果をまとめたものである。

7）クゼエフとバベンコは「サブエトノス」という術語も容認しているが，その範囲を，民族学的グループのうちで特に強い自意識を持ち，「独立した民族へと発展する傾向を持ちながらも，結局まだ母体民族から分離されていない」集団に限定している（Kuzeev and Babenko 1992：25）。

8）この地図は（坂内 1997）でも紹介されている。

9）ただし地図の時代区分は，『東スラブ民族学』以降では「19世紀末」に変更されている。

10）19世紀におけるロシア人民族学成立の背景には，ヨーロッパ文化を代表する「都市・知識人・貴族」と，「農村・民衆（ナロード）」との非対称的な関係があった。それゆえ帝政時代のヨーロッパ・ロシアの農村ロシア人を，支配的集団からの一方的な視線によって表象された周辺的な存在だとみなすことも可能だろう。この問題についてはフライアソンの著書（Frierson 1993）が詳しい。

11）西シベリアの古儀式派教徒も，「ケルジャク（kerzhak / kerzhaki）」（ケルジェネツの人の意味）という自称・他称があるにもかかわらず，民族サブグループとはみなされないことがある。それは，この名称が広域で使用されているために，同一名称で呼ばれる人々の内部差が大きいためである。

12）1934年にこの集団について記述したポポフ（Popov 1934）は，同集団名を「ザトゥンドレン

スキー・クレスチヤニン（zatundrenskii krest'yanin / zatundrenskie krest'yane）」と表記している。また『東スラブ民族学』（Shmeleva 1987：55）と『ロシア人』（Aleksandrov et al. 1997：45）でも，ポポフと同じ表記が採用されている。

13）「マカールの夢」における民族表象については，渡邊の論述（2003：11-13）を参照。またヤクチャニンの下位分類には，沿レナ川街道の駅逓馬車の御者業を義務付けられていた集団「ヤムシチク（yamshchik / yamshchiki）」（御者）と，農耕を行う「パシェンヌイ（pashennyi / pashennye）」（耕作民）がある。

14）クゼエフらは，「古参住民」と「沿ヴォルガロシア人」を――ただし「シビリャク（sibiryak / sibiryaki）」（シベリア人），「沿ヴォルガ地方北部ロシア人」の名称で――コサックやポモールと同じ「民族学的グループ」に含めている（Kuzeev and Babenko 1992：21-23）。

15）ロシア連邦先住少数民族基本法の和訳は吉田（2000）に基づきつつ，一部変更した。

16）原題は，「Postanovlenie Pravitel'stva RF ot 24. 03. 2000 No. 255 "O edinom perechne korennykh malochislennykh narodov Rossiiskoi Federatsii"」となる。

17）「ロシア連邦先住少数民族統一リスト」では，先住少数民族としてのカムチャダールはカムチャツカ州の居住者に限定されており，マガダン州のカムチャダールを含んでいない。しかし現在マガダン州では，カムチャダールを先住少数民族と認めているようだ（Khakhovskaya 2003：65）。

18）「ヤクーチヤの北極圏ロシア人古参住民（ポホドチャニンとルスコウスチイネツ）に対し，1999年4月30日付「ロシア連邦先住少数民族の諸権利の保障」に関する連邦法N 82-FZを適用することに関するサハ（ヤクーチヤ）共和国法（2004年4月15日）」（Zakon Respubliki Sakha（Yakutiya）ot 15. 04. 2004 133－3N 269-III o rasprostranenii polozhenii federal'nogo zakona ot 30 aprelya 1999 goda N 82-FZ "O garantiyakh prav korennykh malochislennykh narodov Rossiiskoi Federatsii" na russkikh arkticheskikh starozhilov Yakutii（pokhodchan i russkoust'intsev））。

19）民族帰属の自己決定，および身分証における民族籍欄の削除の問題については，渋谷（2005）が詳しい。

20）オゼロヴァらが地図上に記入したシベリア，ロシア極東のロシア人サブグループのうち，2002年の国勢調査で回答が記録されなかった名称は，アルタイ地方の古儀式派教徒「ポリャーク」だけである。しかしこれは，集計時に民族としての「ポリャーク」（ポーランド人）と混同された可能性が高い。また「ウラレツ」はロシア国外（中央アジア）に居住するため，ロシアの国勢調査には反映されない。逆に地図に載っていないが国勢調査で回答があったのは，同一集団の別名を除くと，「カルィム（karym / karymy）」（ロシア人とブリヤートとの混血者），「ケルジャク」「オプスキー・スタロジール（obskii starozhil / obskie starozhily）」（シベリア中部のオビ地方古参住民）である。

21）2007年1月1日にカムチャツカ州とコリャーク自治管区が合併して「カムチャツカ辺区」が形成された。

22）現在の「カムチャダール」研究は，カムチャツカ半島側とマガダン州側で別々に進行しており，相互比較が十分に行われていない。そのため本項でも，紹介する情報に地域ごとの偏りが生じている。

23）シリナは「カムチャダール」住民が新たに選択した民族籍として，ロシア人，エヴェン，コリャークに加えてオロチ（oroch）を挙げている（Sirina 2005：91）。アムール・サハリン地域の民族であるオロチの名称がここで登場するのは，現マガダン州の一部地域で，エヴェンが1950年

代まで「オロチ」として登録されていたためである（Khakhovskaya 2003：57）。なお2002年の国勢調査時に，マガダン州では126人が自らの民族帰属として「オロチ」を選択している（Federal'naya sluzhba 2004：119）。

24）2002年の国勢調査の結果によると，イテリメンの人口は3,180人で，そのうち72パーセント（2,296人）がカムチャツカ州に，20パーセント（643人）がマガダン州に住んでいる。またカムチャツカ州コリャーク自治管区にイテリメン全体の4割近くが集中する（Federal'naya sluzhba 2004：10, 117–119）。

25）以下，マルコヴェツに関する議論はヴァフチンらの著書（Vakhtin, Golovko and Schweitzer 2004；2005）を参照。

26）2002年の国勢調査で民族帰属を「マルコヴェツ」と答えた者は2名である。またマルコヴェツのあいだでは，最初に登録された「カムチャダール」に帰属意識を持つ者がいるというが（Vakhtin, Golovko and Schweitzer 2004：135–137），今回の調査で民族籍を「カムチャダール」と回答した者は，チュコトカ自治管区全体でも8名しかいなかった（Federal'naya sluzhba 2004：122, 932–937）。

27）ルスコウスチイネツ，ポホドチャニンに関する基本情報は，主にヴァフチンらの著書（Vakhtin, Golovko and Schweitzer 2004；2005）に拠った。

28）2002年の国勢調査における民族帰属の回答者数は，「ルスコウスチイネツ」（8人）と「インディギルシチク」（7人）が計15名，「ポホドチャニン」（5人）および「コルィムスキー」（15人），「コルィムチャニン」（46人）が計66名であった（Federal'naya sluzhba 2004：122, 932–937）。

29）ルスコウスチイネツのロシア人性を強調する一連の活動では，ルスコエ・ウスチエ村出身の郷土誌家チカチョフが果たした役割が大きい（Chikachev 1990）。

30）ただしコサックの軍務は長期にわたり，また馬や武器，軍服などの出費も自己負担だった（Pereselencheskoe upravlenie 1914：370–376；Zateev 2002：159）。

31）原題は，「Zakon RSFSR "O reabilitatsii repressirovannykh narodov" ot 26 aprelya 1991 g. N 1107-I」となる。

32）「民族（natsiya）」と「民族体（narodnost'）」の定義は田中（2001：153–161）を参照。

33）ただし2002年の国勢調査では，民族帰属を「コサック」と回答した人のうち，ロシア語を母語としない者（264人）を，それぞれの言語によってバシキール人，ブリヤート，カルムィク人，ウクライナ人に算入している（Federal'naya sluzhba 2004：7–19）。

34）2002年当時89あった連邦構成主体のうち，国勢調査でコサックを民族籍として回答した者が1人もいなかったのは，ヨーロッパ・ロシア北部のネネツ自治管区，東シベリアのウスチオルダ・ブリヤート自治管区，そしてロシア極東のコリャーク自治管区だけだった。

35）グセフによれば，ロストフ市のコサックたちが国勢調査で民族籍を「コサック」，母語を「ロシア語」と回答すると決定していたのに対し，隣接州の州都ヴォルゴグラードでは民族籍を「コサック＝ロシア人」と回答するようにとの呼びかけが行われていたという。

36）「北ロシア」または「セーヴェル」の歴史とイメージについては望月（2003）を参照。また19世紀末から20世紀初頭において，ロシア人がフィン・ウゴル系諸民族との混血によって形成されたという説が有力であったこと，またそれに対する反論は，ゼレーニンの著書（Zelenin 1991：29–34）を参照。

37）原題は，「Prikaz ot 28 aprelya 2007 g. No. 245 "Ob utverzhdenii Pravil rybolovstva dlya Severnogo rybokhozyaistvennogo basseina"」となる。

38）ロストフ州のコサック関係者は，帝政時代に存在した「ドン軍団州（Oblast' Voiska

Donskogo)」を強く意識している。またシャバエフは現在のポモール運動のなかに，ソ連崩壊前後の州や辺区に現れた共和国化構想（「ポモール共和国」「ウラル共和国」「ヴォログダ共和国」など）の残影を見ている（Shabaev 2006：24）。

39）2008年3月に，チタ州とそこに含まれたアガ・ブリヤート自治管区が合併し，ザバイカル辺区が誕生した。

40）ブリヤート共和国とザバイカル辺区は，帝政時代にザバイカル州を構成していたが，ロシア人の移住は西側に位置する現ブリヤート共和国側から進んでいった。

41）ブリヤート共和国南部では，正教徒ロシア人（＝古参住民）の他称・自称として「シビリャク」（シベリア人）が用いられている。

42）ブリヤート・モンゴル自治共和国は1958年に「ブリヤート自治共和国」と改名され，さらに1990年からは「ブリヤート共和国」となった。

43）この分析は，2001～2004年に筆者がブリヤート共和国ムホルシビリ地区とビチュラ地区で，コサックの子孫を含む地域住民に行ったインタビューに基づいている。

44）セメイスキーを一般「ロシア人」と区別する考え方は，かつて主流派ロシア正教徒が無標の存在として「ロシア人」と呼ばれていたこととも関係がある。その名残として年配のブリヤートのなかには，主流派ロシア正教の洗礼を受けることを「ロシア人になる」と表現する人々がいる（伊賀上 2005：130-131）。

45）特に19世紀後半からは，帝政政府が農業移民奨励策をとったため，ザバイカル地方およびロシア極東への移住者は激増した。1897年時点におけるザバイカル州とヤクーツク州の公式ロシア人人口は，前者が約44万人（同州全体の66パーセント）であるのに対し，後者では約3万人（同11パーセント）にしかならなかった（Pereselencheskoe upravlenie 1914：82-85）。

46）現在ブリヤート共和国では，エヴェンキとソヨトが先住少数民族に認定されているが，筆者の知るかぎりでは，彼らの生業（トナカイ放牧や狩猟）に従事しつつ，ロシア人としてのアイデンティを保つ固定的な集団（個人ではない）は存在しない。またザバイカル地方およびイルクーツク州の「カルィム」は，ロシア人またはブリヤートと融合していく傾向があり，タタールの「サブグループ」であるクリャシェンのように，独自の集団として認識されることが少ない（伊賀上 2005）。

47）もちろん，研究者や政治家と一般住民のあいだでは，民族共和国に対して抱く感情に相違が見られる。たとえばセメイスキー出身の社会学者ペトロヴァは，著書のなかでブリヤート共和国主権化への危惧を表明しつつも，ロシア人の共和国構成員としての自覚の低さに苦言を呈している（Petrova, E. V. 1999：113-114）。

48）このような試みは，ロシア連邦全体でもまだ珍しい。たとえば類似の題名を持つ『ヤクート地方のロシア人住民』（Petrova, T. P. 2004）は，サハ共和国内の特定集団のみを考察対象としている点，また著者の逝去を機に著作がまとめられたため，全編を貫く主張がない点で，『ブリヤート地方のロシア人』とは性格を異にする。

49）ソ連形成期に民族共和国の存在が「民族」統合に大きな役割を果たした事実については，渡邊（2005）を参照。

50）ザテエフは「コレンノイ」の範囲をロシア人移民に限定せず，その他の非共和国名称民族（ウクライナ人，ポーランド人など）にも拡大して考えている（Zateev 2002：28）。

51）ロシア，ソ連の日常生活における「民族」概念の使われ方，および日常感覚とのずれについては，渡邊（1997），佐々木（2007）などの議論がある。

文　献

Aleksandrov, V. A. et al.（eds）（Александров, В. А. и др. ред.）
1997 *Русские*. Москва: Наука.
Arel, D.
2002 Demography and Politics in the First Post-Soviet Censuses: Mistrusted State, Contested Identities. *Population*（*English edition*） 57: 801–827. Paris: Institut National d'Etudes Démographiques.
Argudyaeva, Yu. V.（Аргудяева, Ю. В.）
1997 *Крестьянская семья у восточных славян на юге Дальнего Востока России (50-е годы XIX в. - начало XX в.)*. Москва: Институт этнологии и антропологии РАН, Институт истории, археологии и этнографии народов Дальнего Востока ДВО РАН.
坂内徳明
1997 「民衆文化・民族文化からみたロシア」北海道大学スラブ研究センター編『ロシア文化の新しい世界』（北海道大学スラブ研究センター公開講座）pp. 63–71, 札幌：北海道開発問題研究調査会。
2004 「民俗学」川端香男里他編『［新版］ロシアを知る事典』pp. 731–732, 東京：平凡社。
Bernshtam, T. A.（Бернштам, Т. А.）
1983 *Русская народная культура поморья в XIX - начале XX в.* Ленинград: Наука.
Bromlei, Yu. V.（Бромлей, Ю. В.）
1981 *Современные проблемы этнографии:очерки теории и истории*. Москва: Наука.
1983 *Очерки теории этноса.* Москва: Наука.
Brusina, O. I.（Брусина, О. И.）
2001 *Славяне в Средней Азии*. Москва: Восточная литература, РАН.
Bunak, V. V. and I. M. Zolotareva（eds）（Бунак, В. В. and И. М. Золотарева ред.）
1973 *Русские старожилы Сибири*. Москва: Наука.
Burykin, A. A. and A. M. Reshetov（Бурыкин, А. А. and А. М. Решетов）
2002 Р. А. Агеева. Какого мы роду-племени? *Этнографическое обозрение* 1: 168–172.
Chikachev, A. G.（Чикачев, А. Г.）
1990 *Русские на Индигирке*. Новосибирск: Наука.
Dolotov, A.（Долотов, А.）
1931 *Старообрядчество в Бурятии (Семейские в Забайкалье)*. Верхнеудинск: Бургосиздат.
Esipov, P.（Есипов, П.）
2007 Непризнанные поморы. *Трибуна (газета)* 29（03 августа）（Internet, 21st May, 2008, http://www.tribuna.ru/articles/2007/08/03/article4151/）.
Federal'naya sluzhba（Федеральная служба государственной статистики）
2004 *Национальный состав и владение языками, гражданство*（Итоги Всероссийской переписи населения 2002 г., 4）. Москва: Статистика России.
Filippova, E. et al.（eds）（Филиппова, Е. и др. ред.）
2003 *Этнография переписи 2002*. Москва: Авиаиздат.

Frierson, C. A.
1993 *Peasant Icons: Representations of Rural People in Late 19th Century Russia*. New York, Oxford: Oxford University Press.
Gurvich, I. S.（Гурвич, И. С.）
1992 Чуванцы. *Этнографическое обозрение* 5: 76–83.
伊賀上菜穂
2003a「体制転換とロシア旧教徒――ブリヤート共和国セメイスキー住民の信仰のゆくえ」『東北アジア研究』 7： 71–91，仙台：東北大学東北アジア研究センター。
2003b「『ロシア人』と『旧教徒』の間――ブリヤート共和国セメイスキーの信仰と自己認識の変容」帯谷知可・林忠行編『スラブ・ユーラシア世界における国家とエスニシティ II』（JCAS Occasional Paper 20）pp. 59–65，大阪：国立民族学博物館。
2003c「ブリヤート共和国ロシア人正教徒の『系譜』と現在――混血， 信仰， 民族籍」佐々木史郎編『ポスト社会主義おける民族・地域社会の構造変動に関する人類学的研究』（平成13～14年度科学研究費補助金研究成果報告書）pp. 173–185，大阪：国立民族学博物館。
2005 「『洗礼ブリヤート』から『ロシア人』へ――ブリヤート共和国一村落に見る帝政末期正教化政策とその結果」『ロシア史研究』76： 118–135。
2006 「過去と現在を結ぶ――ポスト社会主義時代におけるロシア古儀式派教徒のアイデンティティ化」仙葉豊・高岡幸一・細谷行輝編『言語と文化の饗宴』pp. 215–230，東京：英宝社。
2007 「ブリヤート共和国の古儀式派会議――ザバイカル地方訪問記」『セーヴェル』24： 31–40，大阪：ハルビン・ウラジオストクを語る会。
井上紘一
1987 「民族」石川栄吉他編『文化人類学事典』pp. 749–751，東京：弘文堂。
Kappeler, A.
2001 *The Russian Empire: A Multiethnic History*, translated by Alfred Clayton. Harlow, England: Pearson Education.
Khakhovskaya, L. N.（Хаховская, Л. Н.）
2003 *Камчадалы Магаданской области*. Магадан: Северо-восточный комплексный научно-исследовательский институт ДВО РАН.
Khoperskaya, L. L.（Хоперская, Л. Л.）
2005 Казачество и перепись: метаморфозы идентичности. In *Краткое содержание VII конгресса этнографов и антропологов России*, стр. 463（Internet, 21st May, 2008, http://www.kunstkamera.ru:8081/science/congress2005/23.pdf）.
Komissiya（Комиссия для исследования землевладения и землепользования в Забайкальской области）
1898 *Материалы 6: Население, значение рода у инородцев и ламаизм*. Санкт-Петербург: Государственная типография.
Kozlov, V. I.（ed.）（Козлов, В. И. ред.）
1995 *Русские старожилы Закавказья: молокане и духоборцы*. Москва: Институт этнологии и антропологии РАН.
Kuzeev, R. G. and V. Ya. Babenko（Кузеев, Р. Г. and В. Я. Бабенко）
1992 Этнографические и этнические группы（к проблеме гетерогенности этноса）. In Р. Г. Кузеев and В. А. Тишков（ред.）*Этнос и его подразделения*, ч. 1., стр. 17

–37. Москва: Институт этнологии и антропологии РАН, Институт истории, языка и литературы БНЦ УрО РАН.

Lamin, V. A. and N. S. Stashkevich（eds）（Ламин, В. А. and Н. С. Сташкевич отв. ред.）
2000 *Белорусы в Сибири*. Новосибирск: Издательство СО РАН.

Lipinskaya, V. A（Липинская, В. А.）
1996 *Старожилы и переселенцы: русские на Алтае XVIII - начало XX века*. Москва: Наука.

Loginov, K. K.（Логинов, К. К.）
2006 *Этнолокальная группа русских Водлозерья*. Москва: Наука.

宮崎衣澄
2005 「シベリアの古儀式派――アルタイ，ザバイカル地方を中心に」中京大学社会科学研究所ロシア研究部会編『東シベリアの歴史と文化』pp. 228–247，東京：成文堂。

望月哲男
2003 「ロシアの北／北のロシア」『現代文芸研究のフロンティア 4』（スラブ研究センター研究報告シリーズ93）pp. 89–100，札幌：北海道大学スラブ研究センター。

Murashko, O.
1997 Itelmens and Kamchadals: Marriage Patterns and Ethnic History. *Arctic Anthropology* 34（1）: 181–193.

Obshchina pomorov（Община поморов）
2008 *Официальный сайт Общины Поморов*（Internet, 21st May, 2008, http://pomorland.narod.ru/index.htm）.

Ozerova, G. N. and T. M. Petrova（Озерова, Г. Н. and Т. М. Петрова）
1979 О картографировании групп русского народа на начало XX в. *Советская этнография* 4: 72–79.

Pereselencheskoe upravlenie（ed.）（Переселенческое управление Главного управления землеустройства и земледелия ред.）
1914 *Азиатская Россия*, т. 1. Санкт-Петербург: Товарищество «А. Ф. Маркс».

Petrova, E. V.（Петрова, Е. В.）
1999 *Социокультурная адаптация Семейских Забайкалья*. Улан-Удэ: Издательство Бурятского научного центра СО РАН.
2001 Этносоциальные проблемы русского населения Республики Бурятия. In П. А, Рандалов и др.（ред.）*Проблемы нового этапа культурного возрождения народов Бурятии*, стр. 41–51. Улан-Удэ: Издательство Бурятского научного центра СО РАН.

Petrova, T. P.（Петрова, Т. П.）
2004 *Русское население Якутии*. Якутск: Якутский филиал, Издательство СО РАН.

Popov, A. A.（Попов, А. А.）
1934 Затундренские крестьяне（Русские на Пясине. Путевые заметки）. *Советская этнография* 3: 77–86.

Pozdeeva, I. V.（Поздеева, И. В.）
2001 Возможности и задачи комплексного изучения традиционной культуры русского старообрядчества на современном этапе. In Р. П. Матвеева и др.

（ред.）*Старообрядчество: история и современность, местные традиции, русские и зарубежные связи*, стр. 6–10. Улан-Удэ: Издательство Бурятского научного центра СО РАН.

Pronshtein, A. P. and K. A. Khmelevskii（Пронштейн, А. П. and К. А. Хмелевский）

1973 Казачество. In А. М. Прохоров и др. (ред.) *Большая советская энциклопедия*, т. 11, стр. 175–177. Москва: Советская энциклопедия.

佐々木史郎

2001 「近現代のアムール川下流域と樺太における民族分類の変遷」『国立民族学博物館研究報告』26（1）：1–78。

2004 「ロシア ── アムール・サハリン地方の民族分類の変遷と民族意識の形成」青柳真智子編『国勢調査の文化人類学』pp. 119–142，東京：古今書院。

2007 「サハ共和国北部における重層するアイデンティティとエスニシティ」煎本孝・山田孝子編『北の民の人類学』pp. 229–246，京都：京都大学学術出版会。

Shabaev, Yu. P.（Шабаев, Ю. П.）

2006 Новые идентичности у финно-угров как политические инструменты. *Этнографическое обозрение* 1: 13–27.

渋谷謙次郎

2004 「現代ロシアの国家統一と民族関係立法（3）」『神戸法学雑誌』53（4）：179–292。

2005 「現代ロシアの国家統一と民族関係立法（4）」『神戸法学雑誌』54（4）：201–233。

塩川伸明

2004 『多民族国家ソ連の興亡Ⅰ 民族と言語』東京：岩波書店。

Shmeleva, M. N.（Шмелева, М. Н.）

1987 Русские. In К. В. Чистов et al.（eds）*Этнография восточных славян*, стр. 46–100. Москва: Наука.

Sirina, A. A.（Сирина, А. А.）

2005 Кто такие камчадалы и почему ты - один из них? In Е. А. Пивнева and Д. А. Функ（ред.）*В поисках себя*, стр. 85–107. Москва: Наука.

Slocum, J. W.

1998 Who, and When, Were the Inorodtsy?: The Evolution of the Category of “Aliens” in Imperial Russia. *The Russian Review* 57: 173–190.

Sokolova, Z. P., N. I. Novikova, and N. V. Sorin-Chaikov（Соколова, З. П., Н. И. Новикова, and Н. В. Сорин-Чайков）

1995 Этнографы пишут закон: контекст и проблемы. *Этнографическое обозрение* 1: 74–88.

Sunderland, W.

1996 Russians into Iakuts?: “Going Native” and Problems of Russian National Identity in the Siberian North, 1870s–1914. *Slavic Review* 55（4）: 806–825.

高倉浩樹

1994 「ギリヤーキからニヴヒへ ── 民族呼称の成立に関する一考察」『民族学研究』59（2）：131–146。

田中克彦

2001 『言語からみた民族と国家』（岩波現代文庫），東京：岩波書店（初出は1978年）。

Terent'eva, L. N.（Терентьева, Л. Н.）
1969 Определение своей национальной принадлежности подростками в национально-смешанных семьях. *Советская этнография* 3: 12–21.
Thompson, N.
2003 The Native Settler: Contesting Local Identities on Russia's Resource Frontier. *Polar Geography* 27（2）: 136–158.
Troinitskii, N. A.（ed.）（Тройницкий, Н. А. ред.）
1899–1905 *Первая всеобщая перепись населения Российской Империи 1897 г.* Санкт-Петербург: Центральный статистический комитет Министерства внутренних дел.
植田　樹
2000 『コサックのロシア ── 戦う民族主義の先兵』東京：中央公論社。
Vakhtin, N. B., E. V. Golovko, and P. Schweitzer（Вахтин Н. Б., Е. В. Головко, and П. Швайцер）
2004 *Русские старожилы Сибири*. Москва: Новое издательство.
2005 The Difficulty of Being Oneself: Identity Politics of "Old Settlers" Communities in Northern Siberia. In E. Kasten（ed.）*Rebuilding Identities: Pathways to Reform in Post-Soviet Siberia,* pp. 135–151. Berlin: Dietrich Reimer Verlag.
Vasilevskii, V. I. and V. V. Perminov（eds）（Василевский В. И. and В. В. Перминов сост.）
2002 История Забайкальского казачьего войска（Краткая хронология）. S. l.（2006 *Казачество Забайкалья: история и культура.* Улан-Удэ: Национальная библиотека Республики Бурятия, DVD-ROM.）.
渡邊日日
1997 「民族の解釈学へのプロレゴメナ ── セレンガ・ブリヤート，1996」井上紘一編『民族の共存を求めて 2』pp. 106–153，札幌：北海道大学スラブ研究センター。
2003 「帝国の文化か，批判の表象か ── 帝政期シベリアにおける『民族誌的多様性』について」『超域文化科学紀要』8：5–44，東京：東京大学。
2005 「文字を学び，知識を積んで，『郷土』を知ろう ── ソビエト期南シベリアに於ける文化政策としての『文化建設』について」『文化人類学』69（4）：497–519。
安村仁志
1983 「現代の古儀式派」『中京大学教養論叢』24（3）：223–246。
吉田　睦
2000 「ロシア連邦先住少数民族基本法の採択と先住少数民族をめぐる法的状況」齋藤晨二編『シベリアへのまなざし 2 ── シベリア狩猟・牧畜民の生き残り戦略の研究』（平成 9 ～11年度科学研究費補助金研究成果報告書）pp. 28–44，名古屋：名古屋市立大学。
Zateev, V. I.（ed.）（Затеев, В. И. ред.）
2002 *Русские в Бурятии*. Улан-Удэ: Издательство Бурятского госуниверситета.
Zelenin, D. K.（Зеленин, Д. К.）
1991 *Восточнославяская этнография*. Перевод с немецкого языка К. Д. Цивиной. Москва: Наука.

Zhambalova, S. G. (Жамбалова, С. Г.)

2000 *Профанный и сакральный миры Ольхонских бурят (XIX-XX вв.)*. Новосибирск: Сибирская издательская фирма “Наука”.

Zhilin, A. M. (Жилин, А. М.)

1999 Камчадал — национальность или прозвище? *Бюллетень* 25 (Иитернет-публикация центра «Лььоравэтльан») (Internet, 21st May, 2008, http://www.indigenous.ru/fotki/bull_ru/r_25.htm#kamchadal).

Zubkova, E. and A. Kupriyanov (Зубкова, Е. and А. Куприянов)

1999 Возвращение к “русской идее.” In К. Аймермахер and Г. Бордюгов (ред.) *Национальные истории в советском и постсоветских государствах*, стр. 299–328. Москва: АИРО-XX.